

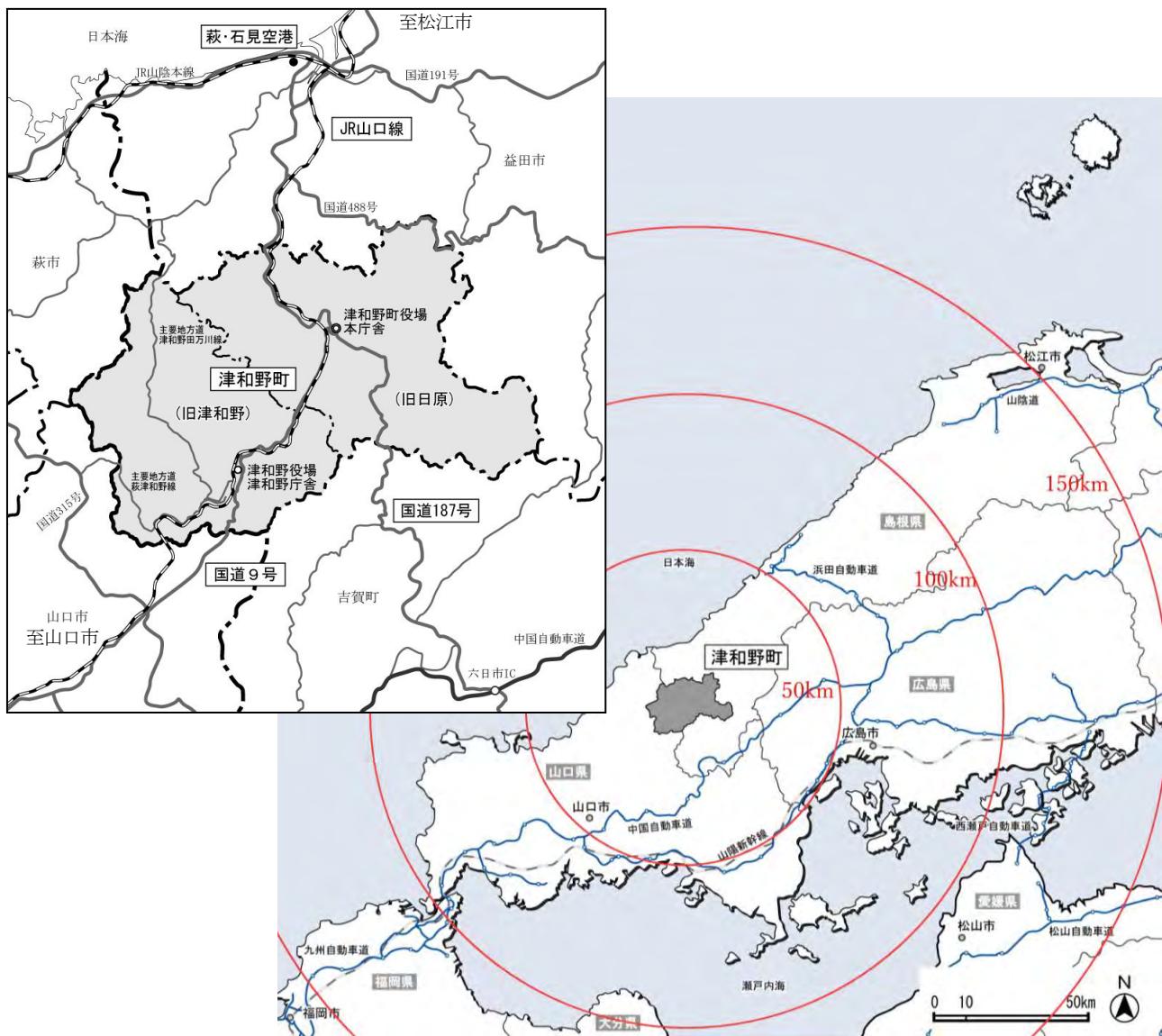
第1章 津和野町の歴史的風致形成の背景

第1節 自然的環境

1 位置

津和野町は、島根県の最西端に位置し、町域の北及び東側は益田市、南側は吉賀町、北西側は山口県萩市、南西側は山口市に接している。面積は 307.03 km²、南北約 19km、東西約 27 km ある。

主要都市との位置関係を距離(道路)でみると、島根県の県庁所在地・松江市からは約 190 km、広島市からは約 130 km、山口市からは約 60 km の距離にある。



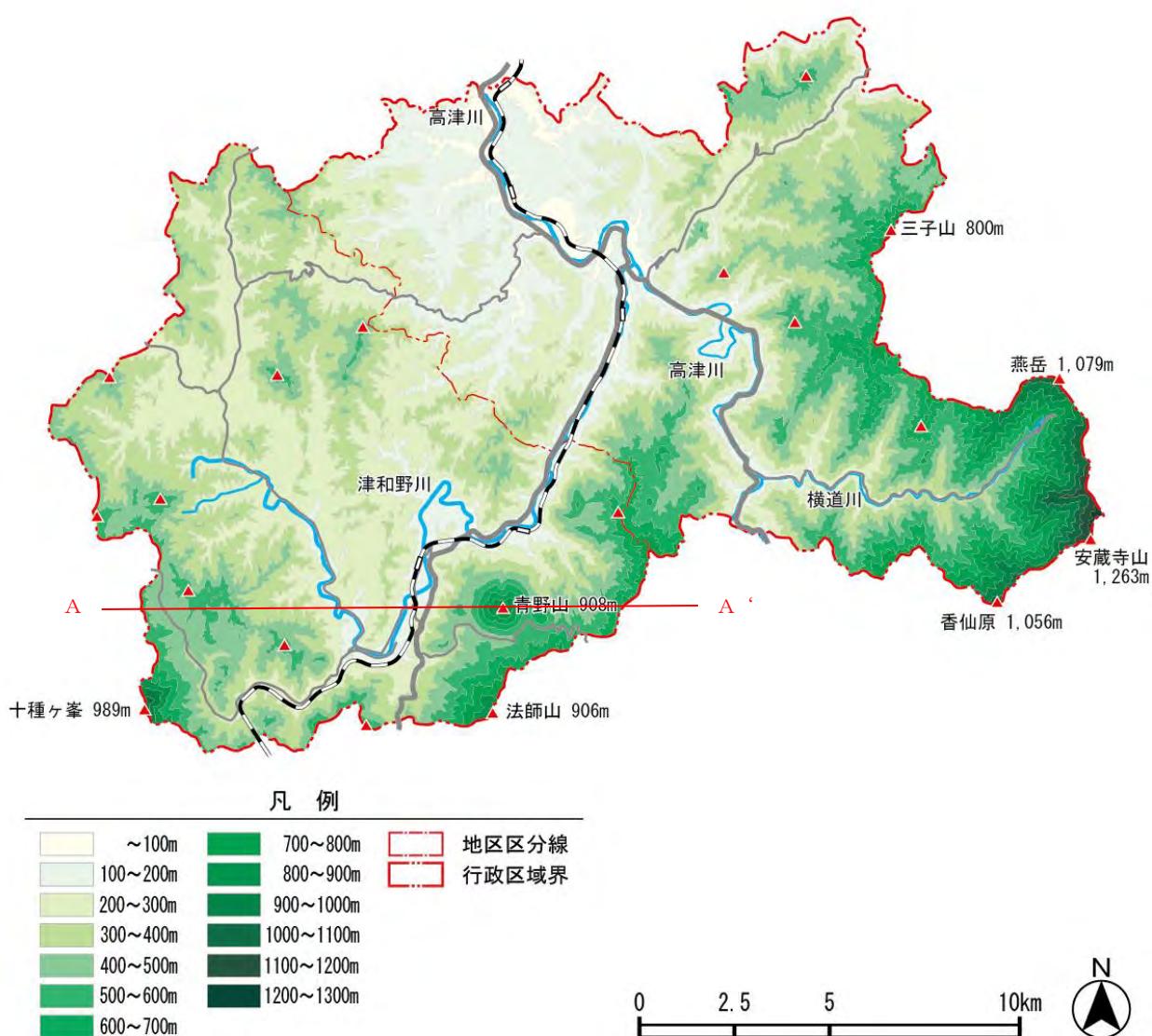
津和野町の位置

2 地形

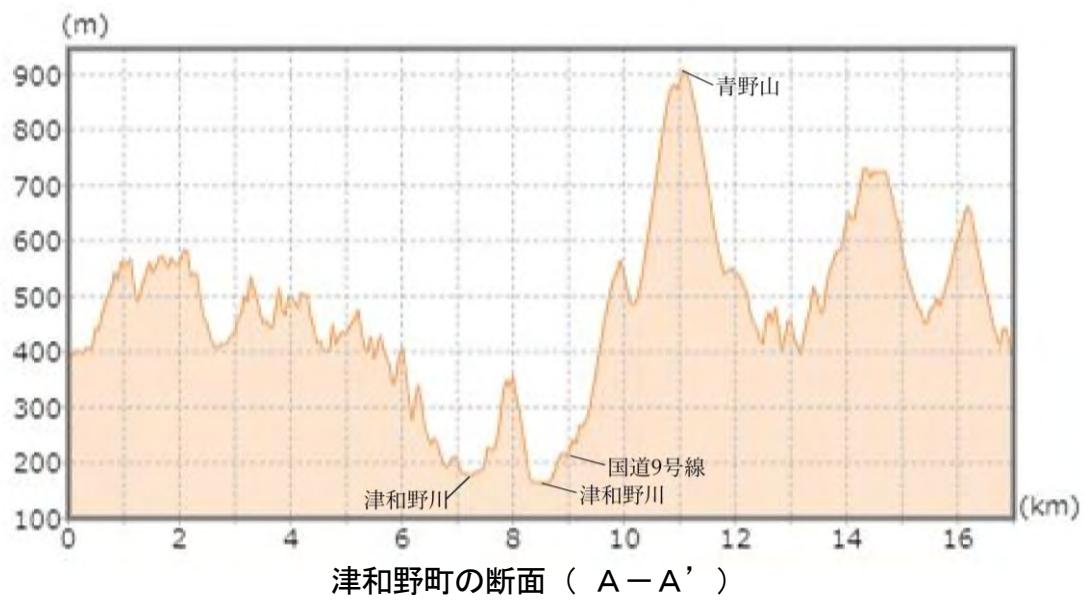
津和野町は、中国山地の北面に位置し、山地部を中心とした中で、高津川^{※1}やその支流に沿って数多くの小規模な平地が形づくられ、典型的な中山間地域となっている。中でも畠村には広大な段丘が形成されているが、新生代第四紀（約258万年前から現在に至る地質の時代区分）の海進と海退による海成段丘で、島根県内では類例がないとされる。

町域の南東側には、島根県（県境以外）で一番標高の高い安蔵寺山（1,263m）をはじめ、燕岳（1,079m）、香仙原（1,056m）といった千メートル級の山々が連なり、一部高津川などとぎれるものの、そこから緩やかに下る形で、町域の南・東側を中心に稜線が連なる。また、町域の南西部には青野山火山群の山々が点在しており、その主峰である青野山（908m）はランドマークにもなっている。

地質的な特徴としては、本町は近畿から中国地方にかけて帶状に広がる「舞鶴帯^{※2}」の最西端に位置し、日本最古となる25億年前の「花崗片麻岩」が見つかった。



津和野町の地形

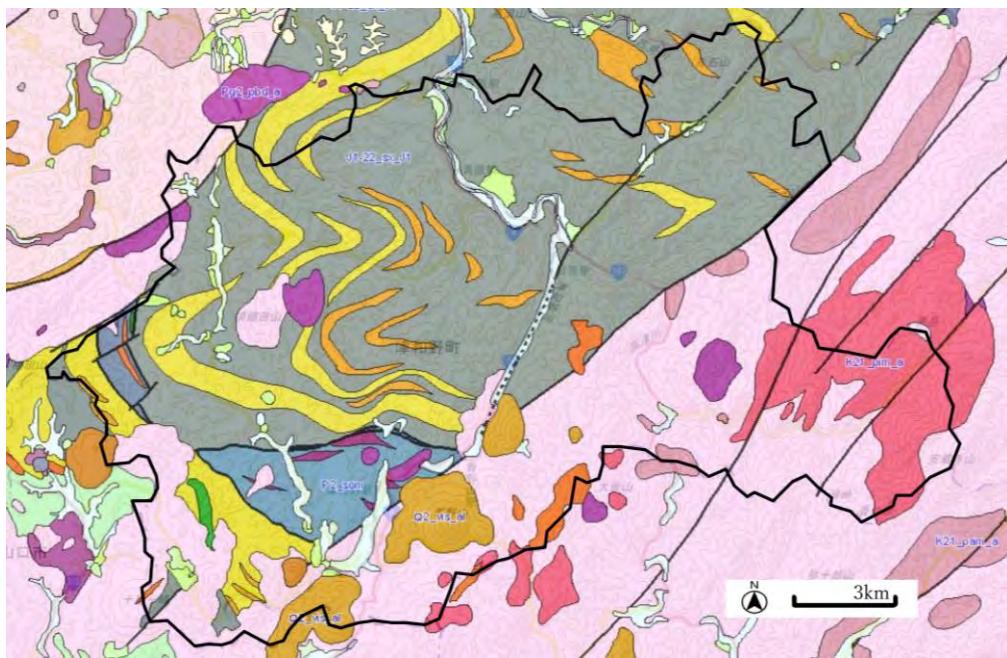


※1 高津川

島根県西部を流れる一級河川高津川水系の河川で、全長約 81 km。一級河川で唯一ダムがない（砂防ダムを除く）。日本有数の水質を誇り、平成 18 年(2006)、平成 19 年(2007)、平成 22 年(2010)～平成 25 年(2013)、及び令和元年(2019)に一級河川の水質日本一（国土交通省水質調査「全国一級河川の水質現況の公表」）となる。

※2 舞鶴帯

日本の地体構造区分上、西南日本内帯における区分名の一つ。京都府北部の舞鶴市付近から西南西に延びて津和野町付近に至る幅約 20 km、長さ約 200 km の地帯。津和野町では、25 億年前に形成された花崗岩が、18.3 億年前に変成作用で花崗片麻岩となった岩石が発見された。



資料：産総研地質調査総合センター20万分の1の日本シームレス地質図V2

※1/25,000 植生図・GISデータ(環境省自然環境局生物多様性センター)を使用し、作成・加工したものである。

凡例	岩相	地質時代
チャート		後期ミシシッピアン亜紀 ～前期ジュラ紀
中期-後期ペルム紀付加体 玄武岩		後期ミシシッピアン亜紀 ～シスウラリアン世
中期-後期ペルム紀付加体 チャート		後期ミシシッピアン亜紀 ～グアダルビアン世
谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物		完新世
砂岩		パッジョシアン期
混在岩		
花崗岩 塊状		セノマニアン期 ～サントニアン期
閃綠岩・石英閃綠岩		
花崗閃綠岩・トナール岩 塊状		セノマニアン期 ～サントニアン期
貫入岩 デイサイト・流紋岩		
大規模火碎流 デイサイト・流紋岩		ペルム紀
斑れい岩		
海生層 泥岩		グアダルビアン世
中期-後期ペルム紀付加体 砂岩		グアダルビアン世 ～ロービンジアン世
中期-後期ペルム紀付加体 混在岩		
溶岩・火碎岩 安山岩・玄武岩質安山岩		チバニアン期
溶岩・火碎岩 安山岩・玄武岩質安山岩		後期更新世
段丘堆積物		前期更新世
段丘堆積物		後期更新世中期 ～後期更新世後期
緑泥石帶 苦鉄質片岩		ラディニアン期 ～オックスフォーディアン期
緑泥石帶 泥質片岩		
ざくろ石帶 珪質片岩		

地質図

3 植生

津和野町の植生は、全体的に「ヤブツバキクラス域代償植生」と「植林地・耕作地植生」が混在した状況が広がっている。また、あぞうじやま 安蔵寺山やあおのやま 青野山の周辺などでは「ブナクラス域代償植生」がみられる。

この他、「ヤブツバキクラス域自然植生」が一部でみられる。

植生についての説明

○植生区分とクラス域

日本の植生は、自然植生の構成種の名をとって、高山帯域(高山草原とハイマツ帯)、コケモーモートウヒクラス域(亜高山針葉樹林域)、ブナクラス域(落葉広葉樹林域)、ヤブツバキクラス域(常緑広葉樹林域)の各クラス域に大別されている。この「クラス域」とは、広域に分布し景観を特徴づけている自然植生によって植物社会学的に定義されたもので、主要なクラスの生育域のことを指している。

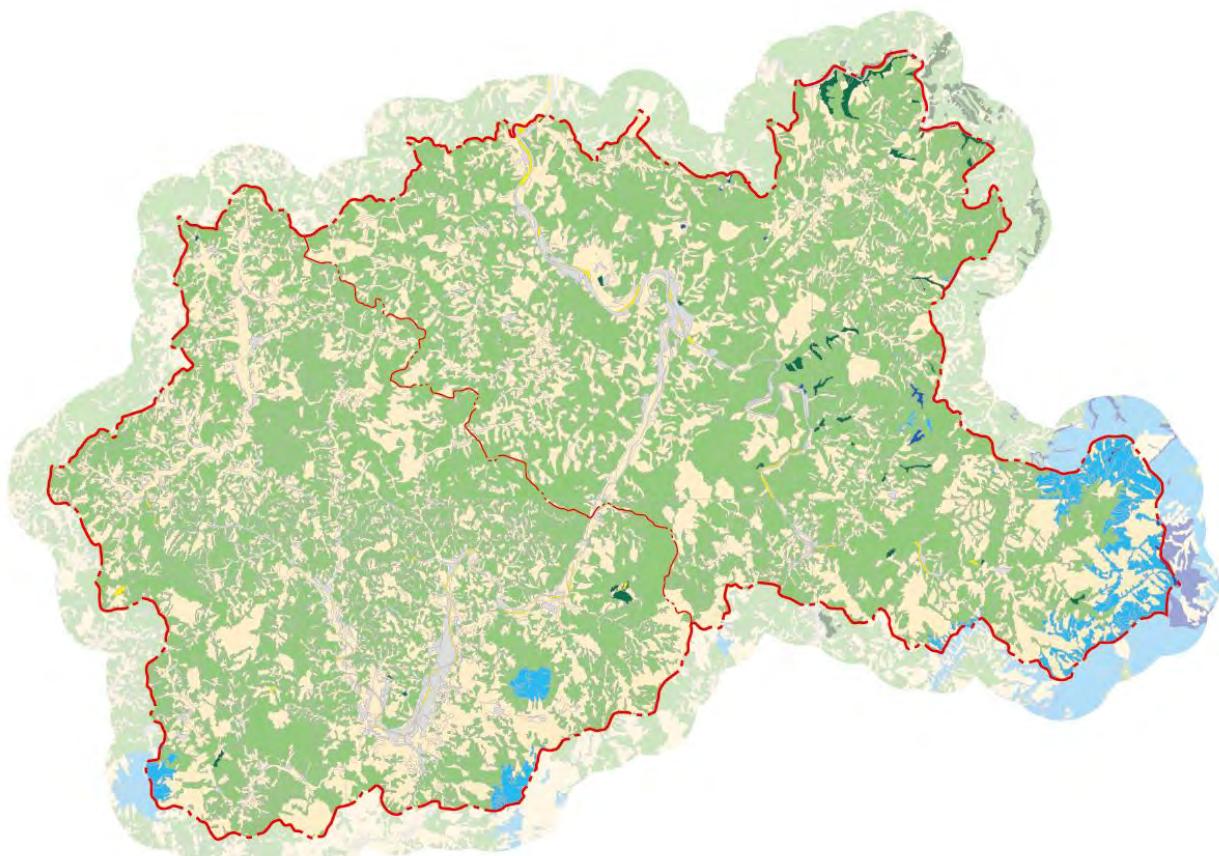
ブナクラス域…日本の落葉広葉樹林域は、群落体系上の最上級単位であるブナクラスの名をとり、ブナクラス域と呼ばれている。ブナクラス域は東北北部から北海道では低地からみられる。南にいくほど高度は上がり、中部日本で標高1500~1600mから600~700mの間に発達し、九州の霧島で700mから1000mとなる。

ヤブツバキクラス域…日本の常緑広葉樹林域は、体系上の最上級単位であるヤブツバキクラスの名をとって、ヤブツバキクラス域と呼ばれている。ヤブツバキクラス域は関東以西の標高700~800m以下で発達し、北にいくほど高度を下げ、東北地方北部では海岸寄りに北上している。逆に南にいくほど高度は上がり、九州の霧島では1000mが上限となる。ヤブツバキクラス域は、本州、四国、九州までの地域と、常緑植物の豊富な奄美大島以南の琉球及び小笠原の亜熱帯域に大きく二分される。

○自然植生と代償植生

現存植生の多くは、本来その土地に生育していた自然植生(原生林など)が人間活動の影響によって置き換えられた代償植生(二次林など)であり、現存植生図の作成にあたっては、植生区分はこれらクラス域の植生について自然植生と代償植生とに区分されている。さらに、河辺・湿原・塩沼地・砂丘などの環境条件の厳しい特殊な立地に生育する植生のように、クラス域を越えて分布する植生(主として自然草原)については、地形や地質的要因で持続する自然植生であるため、特殊立地の自然植生として独立して区分させている。

※出典：環境省自然環境局生物多様性センターHP



凡 例

- █ ブナクラス域自然植生
- █ ブナクラス域代償植生
- █ ヤブツバキクラス域自然植生
- █ ヤブツバキクラス域代償植生
- █ 河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生
- █ 植林地・耕作地植生
- █ その他
- 地区区分線
- 行政区域界



資料：1/25,000 植生図・GIS データ(環境省自然環境局生物多様性センター)

※1/25,000 植生図・GIS データ(環境省自然環境局生物多様性センター)を使用し、作成・加工したものである。

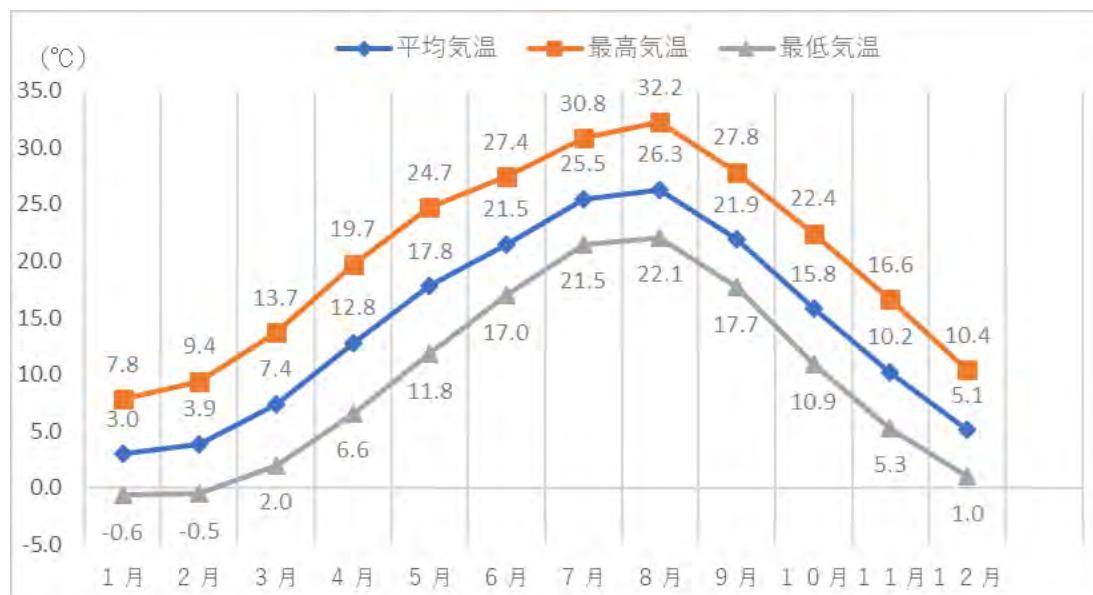
津和野町の植生区分

4 気候

津和野町の気候は、石見地方の日本海沿岸地域と中国山地の稜線部地域との中間的な気候（気温、年間降水量等）であり、日本海沿岸地域よりも気温が低く、年間降水量が多く、冬期には中国山地の稜線部地域ほどではないものの降雪があり、晴天の日が限定されている。また、津和野町をはじめ高津川流域の内陸部では、昼夜の温度差が大きく、たびたび朝霧が発生している。

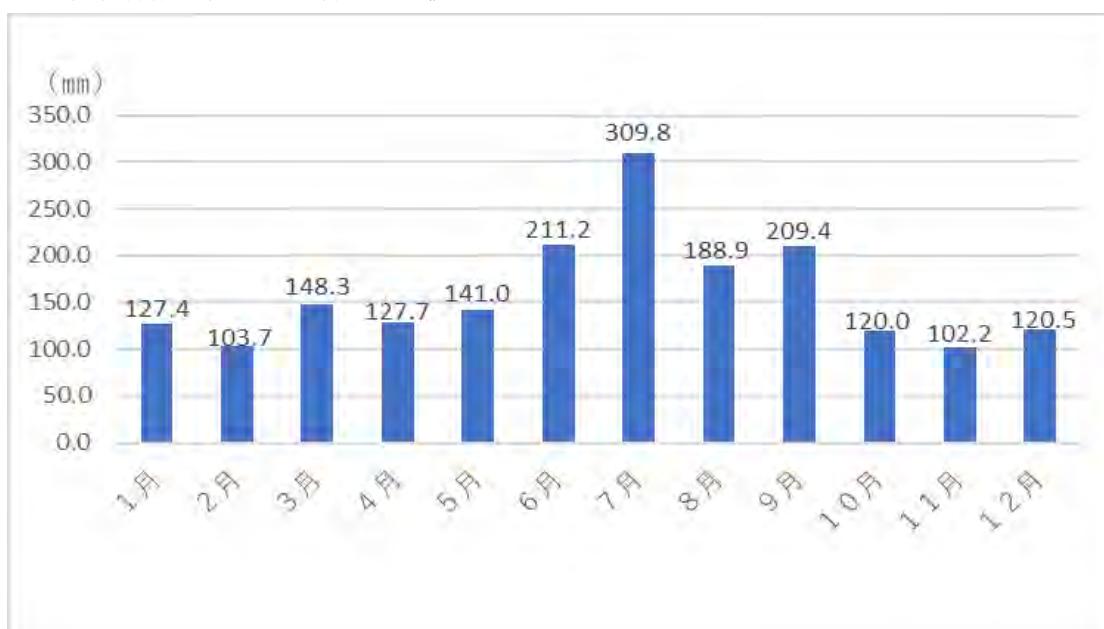
年間平均降水量は約 1910.1 mm（最近 30 年間の平均）となり、瀬戸内や太平洋側と比べて多く、冬期には降雪もある。

気温は、沿岸部と中国山地の稜線（県境）付近などとの中間的な値になっており、年間平均気温は 14.3°C（最近 30 年間の平均）となっている。



資料：気象庁ホームページ（津和野）

※30 年間（平成 3 年～令和 2 年）の平均値



資料：気象庁ホームページ（津和野）

※30 年間（平成 3 年～令和 2 年）の平均値

津和野町の気候

第2節 社会的環境

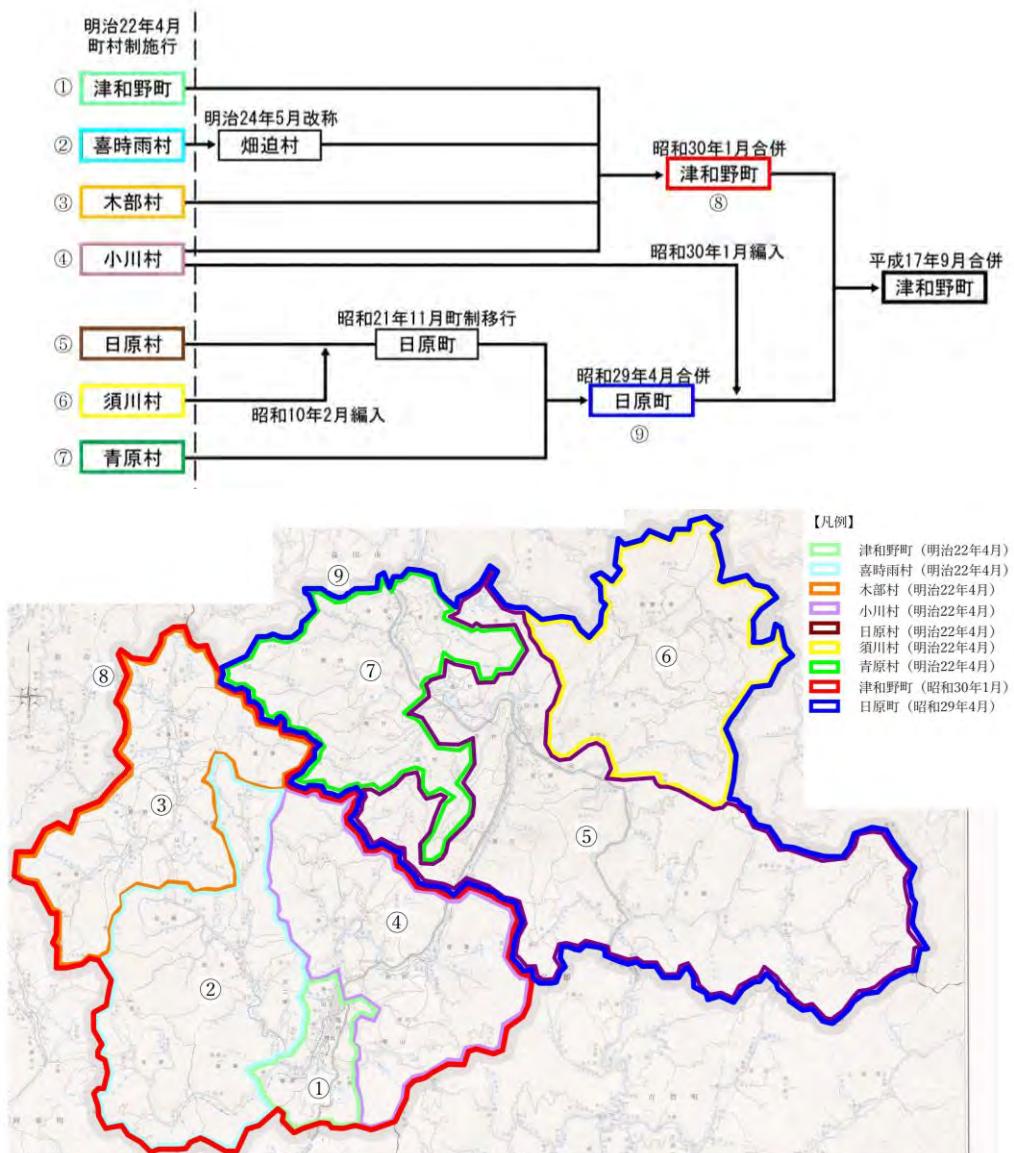
1 津和野町の沿革

津和野町の町域は、明治4年(1871)の廃藩置県によって浜田県（のちに島根県）に属し、明治12年(1879)には現在の津和野庁舎に郡役所が設置され、郡の行政、経済の中心として発展した。

旧津和野町の沿革については、明治22年(1889)の市町村制施行により鹿足郡津和野町が発足、昭和30年(1955)に津和野町、小川村の一部、畠迫村、木部村の近隣四町村が合併し、(新)津和野町となった。

旧日原町の沿革については、明治22年(1889)の市町村制施行により鹿足郡日原村が発足、昭和10年(1935)に鹿足郡須川村を編入、昭和21年(1946)に町制を施行、昭和29年(1954)に青原村と合併し、(新)日原町が発足、さらに昭和30年(1955)に鹿足郡小川村の一部を編入した。

現在の津和野町は、平成17年(2005)9月25日、旧津和野町と旧日原町が合併して誕生した。

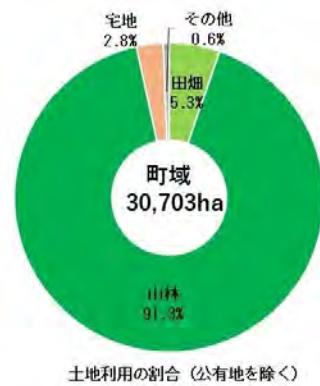


津和野町の沿革

2 土地利用

津和野町の道路等の公有地を除く土地利用の割合は、山林が91.3%、田畠が5.3%、宅地が2.8%、その他0.6%となっており、宅地の割合が増加し、それに伴い田畠が減少している。

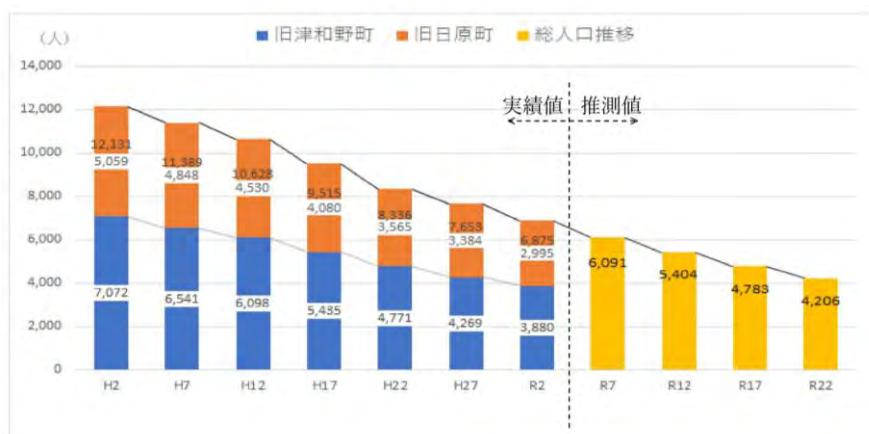
都市計画区域としては、町域30,703haのうち約3.6%の1,108haを都市計画区域に指定している。



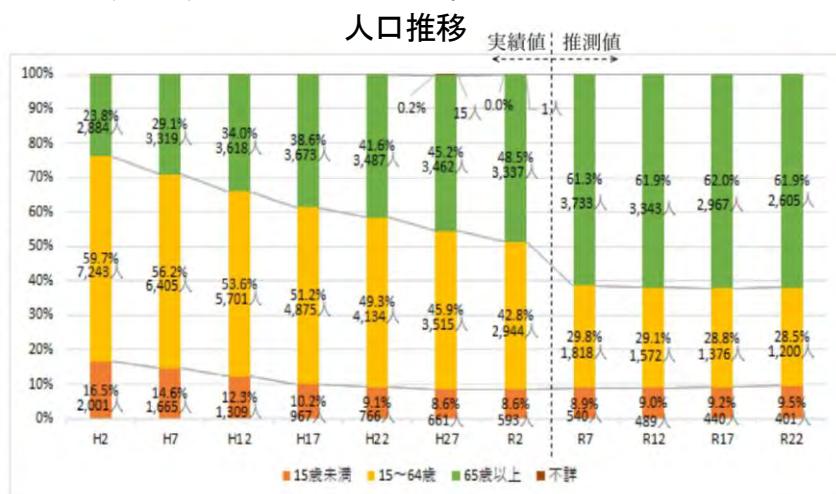
3 人口

津和野町の人口は、令和2年(2020)時点で6,875人(国勢調査)となっている。人口の推移をみると、減少傾向が続いている。ピークの昭和30年(1955)と比べると令和2年は16,000人近く減少(23,224人→6,875人)している。

年齢3区分別でみると、少子高齢化が進み、昭和60年(1985)には65歳以上の割合が15歳未満の割合を逆転し、令和2年(2020)では高齢化率(65歳以上)が48.5%と高くなっている。また、生産年齢人口である15歳~64歳の割合は、平成22年(2010)には5割を切っている。



資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所
※人口は、旧津和野町、旧日原町を合計したものである。



資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所
※人口は、旧津和野町、旧日原町を合計したものである。

年齢3区分別人口割合の推移

4 交通機関

広域的な交通条件をみると、国道9号(京都市～山口市)及び187号(津和野町～岩国市)、主要地方道津和野田万川線、主要地方道萩津和野線などが走っている。

また、JR山口線が通り、北から東青原、青原、日原、青野山、津和野の各駅がある。さらに、南の吉賀町にある中国自動車道・六日市ICが約30km、北の益田市にある石見空港(萩・石見空港)が約25kmの距離にある。

バス網は、JR津和野駅を主要ターミナルとして、路線バスが町域及び周辺市と連絡し運行している。また、広島方面へ昼間高速バス、大阪方面へ夜間高速バスが運行している。



5 産業

津和野町の産業は、平成28年(2016)の全事業所の状況(経済センサス)をみると、411の事業所があり、従業者数は2256人となっている。

産業別でみると、事業所数では卸売業・小売業が126事業所で全体の30.7%を占め最も多く、次いで宿泊業・飲食サービス業が55事業所、建設業が40事業所、生活関連サービス業・娯楽業が39事業所などとなっている。

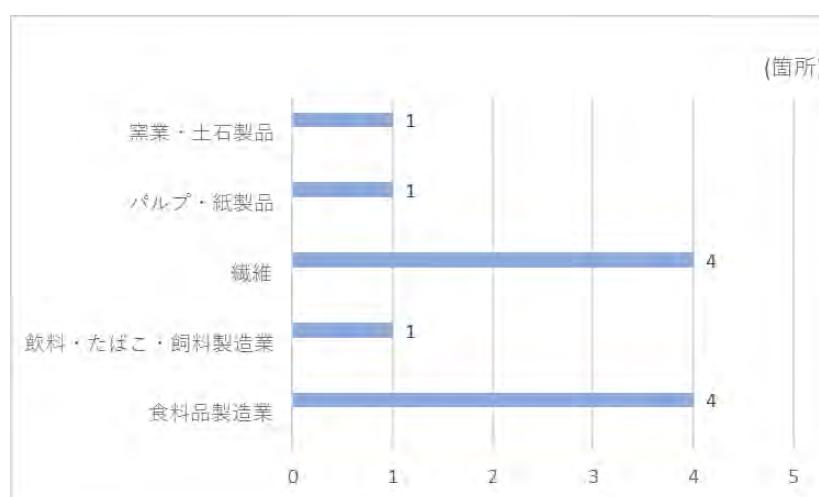
従業者数では、医療・福祉が505人と最も多く、次いで卸売業・小売業が469人、建設業301人などとなっている。

製造業に関しては、令和元年(2019)の工業統計調査をみると、事業所数は食料品製造業及び繊維が最も多くなっている。

区分	事業所数 (事業所)	従業者数 (人)	
昭和 56 年 (1981)	898	5,437	
昭和 61 年 (1986)	867	5,104	
平成 3 年 (1991)	838	4,898	
平成 6 年 (1994)	766	3,915	
平成 8 年 (1996)	811	4,723	
平成 13 年 (2001)	757	4,337	
平成 18 年 (2006)	656	3,559	
平成 21 年 (2009)	613	3,523	
平成 26 年 (2014)	496	2,843	
平成 28 年 (2016)	411	2,256	
産業分類別	農林漁業	11	102
	鉱業	1	1
	建設業	40	301
	製造業	38	278
	情報通信業	1	3
	運輸業・郵便業	13	84
	卸売業・小売業	126	469
	金融業・保険業	10	48
	不動産業・物品賃貸業	8	17
	学術研究・専門・技術サービス業	7	21
	宿泊業・飲食サービス業	55	215
	生活関連サービス業・娯楽業	39	82
	教育・学習支援業	8	11
	医療・福祉	27	505
	複合サービス事業	9	40
	サービス業(他に分類されないもの)	18	79

資料：平成 18 年までは事業所・企業統計調査、平成 21 年以降は経済センサス

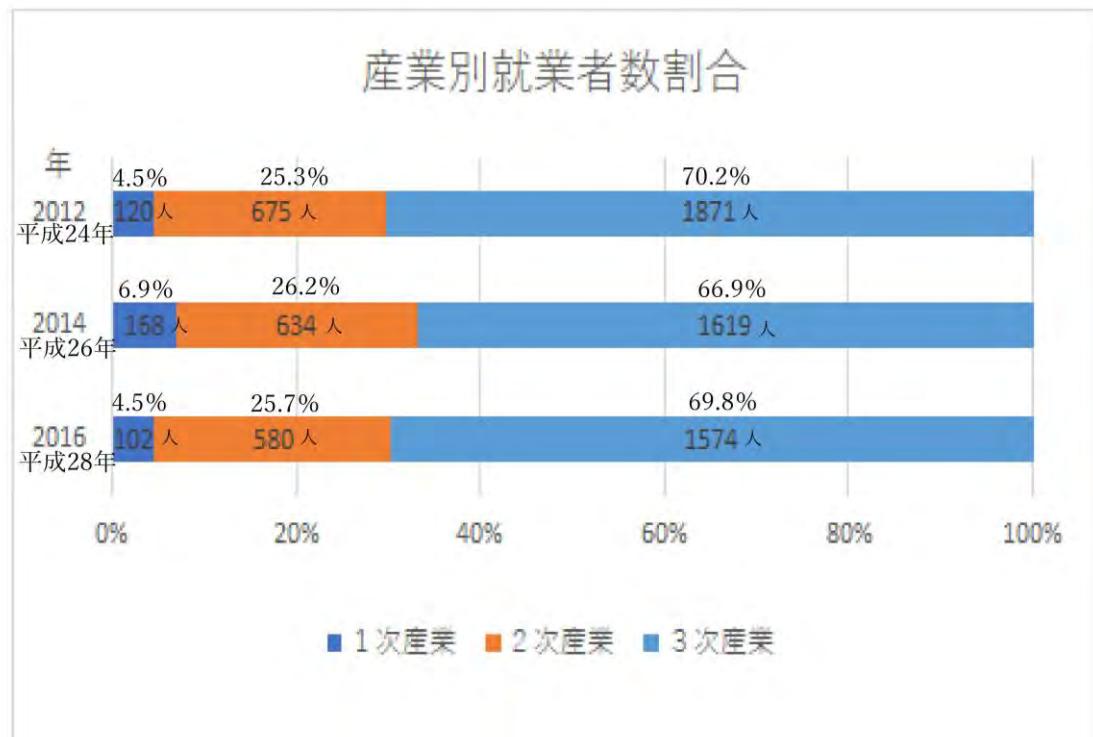
津和野町の事業所の状況



資料：経済センサス

※数値は従業者 4 人以上の事業所

津和野町における工業事業所数



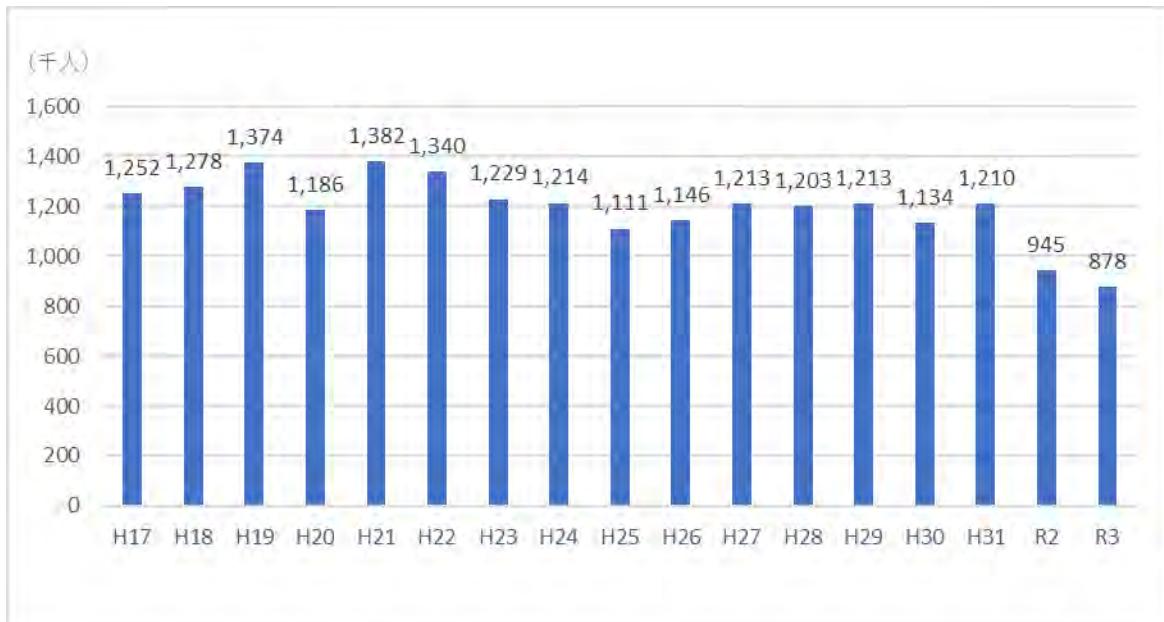
資料：経済センサス

産業別就業者割合

5 観光

津和野町は豊かな自然や歴史文化遺産に恵まれ、島根県石見エリアの代表的な観光地として年間約 100 万人が訪れているが、現在、訪れる観光客は減少傾向となっている。また、来町される観光客の構成比は日帰り層が年々増加している。広域では、古くから人々が行き交うことで文化の交流が育まれてきた津和野街道よってつながる関係自治体や団体が、県境を越えた文化・歴史・まちづくり等についてネットワークを構築し、地域資源を活用した交流事業を推進している。また、春から秋にかけてはSLやまぐち号が運転され、美しい景観をバックにSLを写そうとする鉄道ファンも多数来訪している。SLは津和野の魅力を高める重要な観光資源となっている。全国的に人口減少が加速する中、観光産業は地方経済を支える上で重要度と期待値が高く、地方創生における国策の基幹となっている。

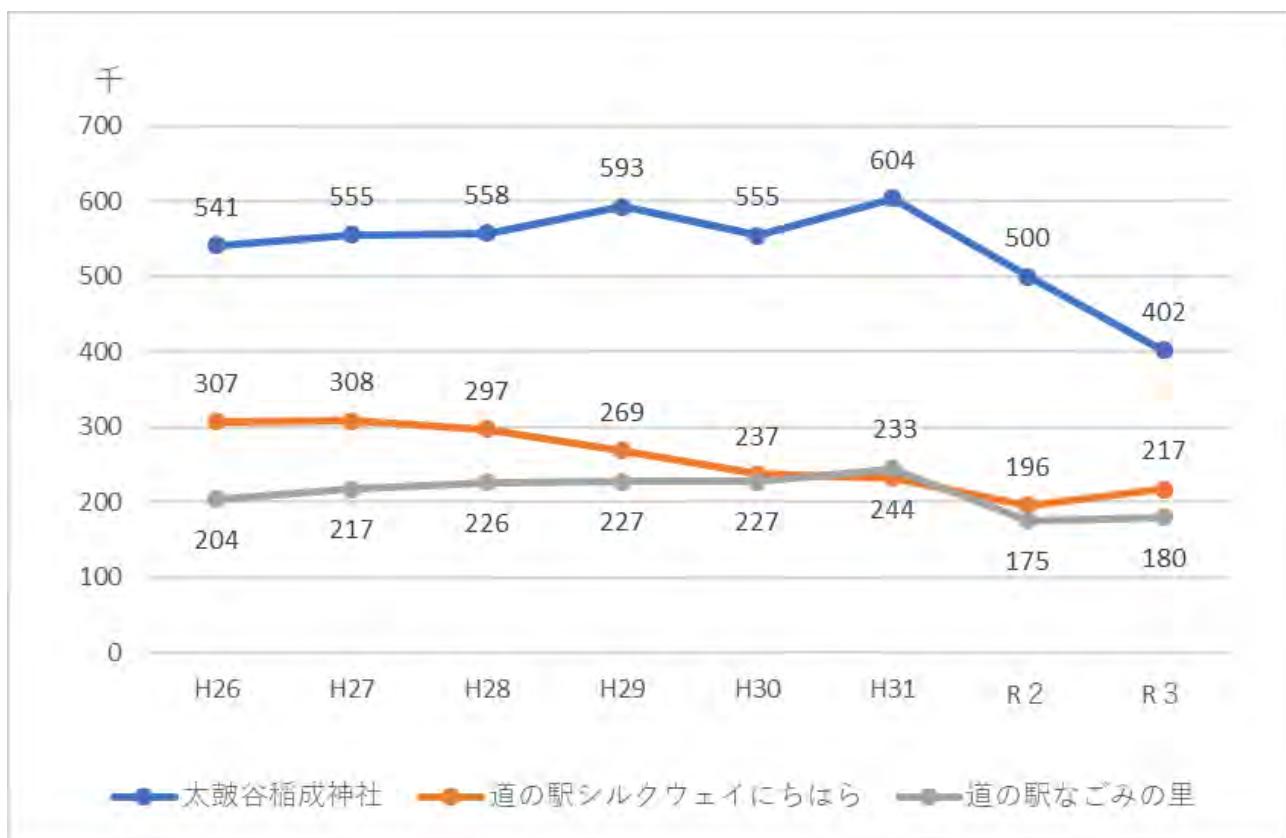
津和野町の観光動向は、令和2年度(2020)より新型コロナウイルスの影響により入込観光客数が落ち込み、令和3年(2021)で約 88 万人となっている。令和3年(2021)の観光地点別にみると太皷谷稻成神社が約 40 万人、道の駅シルクウェイにちはらが約 22 万人、道の駅なごみの里が約 18 万人となっている。



資料：島根県観光動態調査

※数値は全体の観光客数。

津和野町の入込観光客数



資料：島根県観光動態調査

地点別観光客入込数

第3節 歴史的環境

1 原始・古代

津和野町においては、これまでの発掘調査等によつて多くの遺跡が確認され、そのうち最も古いのは後期旧石器時代の可能性がある石器が出土している喜時雨遺跡である。

縄文時代の遺跡としては、早期の山崎遺跡をはじめ、後・晩期を中心とした高田遺跡や大蔭遺跡などがある。これらのうち、山崎遺跡からは縄文時代早期の土器・石器、高田遺跡からは縄文時代後・晩期の土器・石器や管玉、大蔭遺跡からは縄文時代後・晩期の住居跡や土器・石器が、それぞれ出土している。

弥生時代の遺跡としては、横瀬遺跡、高田遺跡、大蔭遺跡などがあり、そのうち高田遺跡、大蔭遺跡は縄文時代から継続した時代の遺跡である。

古墳時代の遺跡としては、狐尾遺跡、中原遺跡などが確認されている。また、古墳としては、鍛治原古墳群、社地脇古墳の2箇所が確認されているのみである。そのため、古墳時代については分からぬ点が多く、今後、調査・研究が求められる。

大化2年(646)に発布された詔による一連の改革(大化の改新)によって行政機構が整備され、大宝元年(701)の大宝律令制定により古代国家は完成をみた。この時期、国郡里(のち郷)制により、津和野地方(旧津和野町、旧日原町)の開発も進み、「能濃郷」となった。承和10年(843)、吉賀郷とともに美濃郡より独立し、石見国鹿足(『延喜式』に記す鹿足、『和名類聚抄』では鹿足、加之阿之)郡「能濃郷」となった。

奈良・平安時代の遺跡としては、大蔭遺跡、大婦け遺跡、野広遺跡、直地遺跡などがある。この時代についても古墳時代と同様に確認されている遺跡は少ないが、町の北西側の木部地区にある大婦け遺跡からは、腰帶金具の銅鎗、木簡、墨書き土器が出土していることから、この時代の官衙の跡であったと推定される。



大蔭遺跡住居跡（縄文時代）



高田遺跡出土遺物（縄文時代）



高田遺跡出土遺物（縄文時代）



大婦け遺跡（奈良・平安時代）

2 中世

■吉見時代(1282~1600 14代 319年)

中世の初めの津和野地方には、すでに地頭代を務める左兵衛尉 がいたが、本格的に開けたのは、元の再々来襲が予測され、山陰沿岸防備のため関東武士の吉見頼行が能登より当地に

下り木曽野に館をかまえた弘安5年(1282)以降のことである。

吉見氏は、永仁3年(1295)に津和野靈亀山(367m)の南方の尾根を削平して、中荒城を築き、これをさらに拡張して靈亀山頂を本丸とし、2代頼直の代まで約30年をかけて一本松城(のちの三本松城、津和野城)を完成させた。

吉見氏11代吉見正頼は、中国地方の有力守護大名大内義隆の姉であった大宮姫を正室として迎えた。義隆は家臣陶晴賢の謀叛により自死し、義兄の吉見正頼は陶氏に三本松城を攻められた。これが天文の役である。城山の全山88箇所に掘られた堅堀・堀切の空壕と正頼の指揮により、吉見方は104日間の籠城に耐え最終的に講和した。

重要無形民俗文化財に指定された弥栄神社の疫病除けの祭りである「鶯舞」は、祇園会に奉納される舞楽で夏の津和野町の風物詩でもあり、京都から山口を経て正頼の時代に始まったものである。

この時代(16世紀)の津和野城の大手は城の西側の喜時雨にあつたと伝えられ、その一帯には吉見氏の居館や中世城下町も存在していたものと推定される。その後、16世紀末には、大手、居館、城下町がそれぞれ東側に移っていったと考えられる。



津和野城跡（国の史跡）の中世山城の堀切



津和野弥栄神社の鶯舞（国の重要無形民俗文化財）



歴史概況に関わる主要な文化財と地名

このような吉見氏の時代も、17世紀を迎えるにあたって終わりを告げた。慶長5年(1600)、西軍の総大将であった毛利氏の重臣吉見氏は関ヶ原の戦いに敗れ、毛利氏とともに萩へ退転した。吉見氏の治世は14代、319年間に及んだ。

3 近世

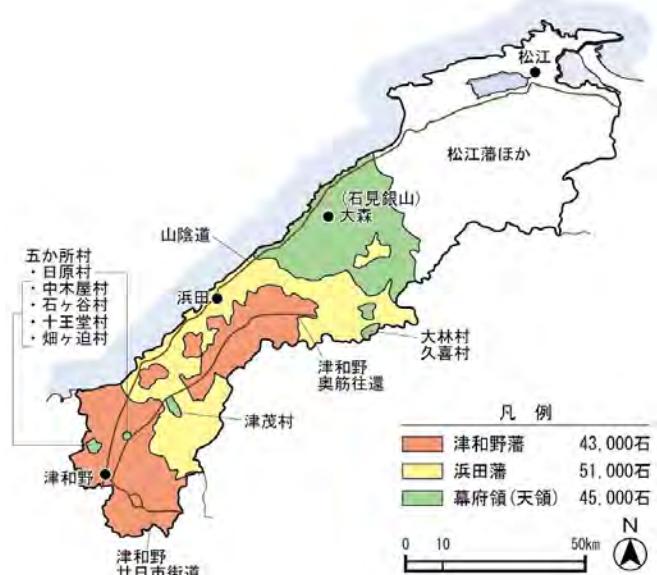
■関ヶ原の戦いの直後

吉見氏の旧領地は一時、幕府の直轄地として大森銀山奉行の支配を受けた。直接、津和野城及び城下を預かったのは、吉見氏の遺臣で土着した堀平吉であった。この後、幕府は津和野地方のうち日原・中木屋・石ヶ谷・十王堂・畠ヶ迫の五か所村(間歩口村)を直轄地とし、大森銀山領の代官の支配下においていた。幕末(嘉永4年(1851))以降、代官は鉱山師の堀藤十郎を五か所取締役とした。

■津和野藩領と街道・往還道

近世における津和野藩領は、現在の津和野町・吉賀町のほぼ全域に加え、益田市・浜田市・邑南町域内にも存在した。また、津和野藩領に囲まれる形で幕府領(天領)の五か所村がある。

これら領内を通る主要な道としては、日本海沿岸部と山口方面をつなぐ山陰道、中国山地の藩領をつなぐ津和野奥筋往還、中国山地を越え瀬戸内海沿岸部へとつながる津和野廿日市街道があった。特に津和野廿日市街道は、津和野藩主の参勤交代で利用され、廿日市には津和野藩の御船屋敷が置かれた。



※『津和野藩ものがたり』(山陰中央新報社、平成28年(2016))の図を参考に作図

津和野藩領と街道・往還道

■坂崎時代(1601~1616 1代 16年)

慶長6年(1601)10月頃、坂崎出羽守成正(直盛)が備前富山城主から3万石の津和野城(三本松城)主として入城した。坂崎氏は、城の出丸として織部丸を石垣で築いた。城の土居を石垣に変え、城の強化を図った。城下町の整備にも力を尽し、大火の多い町中に防火用水のための側溝を掘りめぐらした。

成正是元和元年(1615)、大坂夏の陣で城を落ちのびる途中の豊臣秀頼の正室千姫を救出して実父徳川家康の陣まで護送した。この救出の過程には諸説あるが、一説には家康は大坂城落城の



津和野城跡 (国の史跡)

際、諸将に対し、千姫を城から救出した者に彼女を夫人として与えると約束したという。しかし、家康は成正への再嫁の約束を反古にし、武家ではなく公家へ嫁がせるとしてその候補者選びを成正に任せた。成正は候補者を選んで報告したが、千姫はこれを拒絶し、間もなく伊勢国桑名の本多忠刻ただときへの再嫁が決まった。二度も面目をつぶされた成正は、千姫の輿こしを奪わんとして江戸の屋敷に籠もったが、幕府大目付で親友の柳生宗矩やぎゅうむねのりの諫めにより自死した。坂崎の治政はわずか16年間であったが、名主に澄川与助を抜擢し、豊後より楮苗5万本を購入して移植させた。苗の活着の成果はすぐには成就をみなかつたが、次の代の津和野藩の経済を支える基礎をつくった功労者となつた。

坂崎氏は、津和野藩へお預けとなつてゐた元横手城主(出羽国仙北)の小野寺遠江守義道に養女を与えるなど、政略家であるとともに温情の人でもつた。町では50年ごとに墓のある曹洞宗永明寺で法会を営んでゐる。最近では平成17年(2005)に行われた。

■亀井時代(1617~1871 11代 255年)

この後、元和3年(1617)に新たに因州(鳥取県鹿野町)鹿野城主であった亀井氏2代政矩が津和野藩4万3千石の城主として入城した。さらに坂崎氏が築いた城や城下を整備した。亀井氏初代新十郎茲矩は鹿野に没したが、山陰地方を拠点として九州の諸大名に亘りて東南アジアとの朱印船貿易に活躍した。領内の河川治水などの土木工事及び鉱山開発において名を残している。

津和野藩の行財政は、津和野亀井氏初代政矩(生年不詳~1619)(治政3年)、2代 茲政(1617~1680)(治政62年)、3代 茲親

(1669~1731)(治政51年)の代のはじめまでに概ね確立した。3代にわたる藩主を執政として補佐したのが、家老多胡真清、その次男の主水真益、三男の主水真武、四男の外記真蔭である。特に真益は領民総動員の開墾事業により青野山麓の急斜地を開墾し、耕して天に至る情景は「主水畑」と呼ばれた。真益は他に沼原の7町3反の干拓事業、高津蟠竜湖の20町歩の干拓事業を完遂した。



石見国津和野城下絵図(正保年間)

■亀井氏時代の津和野城

津和野城は中世吉見氏時代の山城から、坂崎氏の改築によって近世城郭となり、次に入城した亀井氏へ引き継がれた。延宝4年(1676)の大地震によって石垣が崩れ、楼閣が大破したが、3代茲親の代に修復を行い、現在も残る石積みを完成させている。その後、貞享2年(1685)には落雷による火災で天守閣や櫓が焼失、以後天守閣は再建されなかつたものの、最後の藩主11代茲監まで、津和野藩の居城として機能した。

■石見半紙の生産で15万石の収益

津和野藩は、農民の借銀・借米を帳消しにしたほか、製紙業にも力を入れ、坂崎氏が試み

た楮苗の植え付けを定着させた。万治元年(1658)には大坂における半紙の売値が6千18丸^{まる}*に上り、奉書紙、杉原紙など文書に用いられる高級紙などその品質の良さから大坂市場では「石州半紙(石見半紙)^{せきしゅうはんし}」として評価を高めた。真益の殖産興業の実績は広く全国的に知られ、江戸中期の儒者で現実に即した経世論を説いた太宰春台は、「津和野侯ノ大夫ガ多胡子半紙ヲ造り、国ヲ富シタルガ如キ、地力ヲ尽セリト云フベキモノナリ」(『經濟録』)、「石州ノ津和野侯ハ四万石ノ祿ナルガ板紙ヲ造出シテ、是ヲ占テ売ル故ニ、十五万石ノ祿ニ比ス」(『經濟録拾遺』)と記して真益の政策を激賞した。

3代茲親のとき家老多胡真武(主水)が、藩の蓄財を銀2,400石47貫、米5,358石にまで拡大させた。儒学者の荻生徂徠は、その著『政談』において「亀井隱岐守(茲親)ガ家老(真武)ノ料簡ニテ石見ニ木ノ曲リ多キヲ考へ、鞍打(鞍作の職人)ヲ招ヨセ、鞍ヲ打セ、夫ヨリ津和野ヨリ鞍出来ル。隱岐守諸方へ音信ニモ之ヲ用フ」と述べ、真武が一木一草もおそらくせずに殖産興業に力を尽したこと讃えている。なお、6代茲胤のときには木地頭小椋伝兵衛が藩主の前で木材の加工(挽物)を披露するなど、藩の産業として後世まで続いた。

殖産興業による藩財政の余剰金は幕府の知るところとなつたのか、禁裏(御所)の造営を命ぜられたのをはじめ、江戸西郊の中野村にあった犬小屋の普請手伝、勅使などの接待役を勤めることは実際に9回にも及び、門番・火防役の公役も含めて津和野藩は出費を強いられた。費用の主なものは、江戸中野村の犬小屋の建築費用(42,400両)、禁裏造営手伝費用(35,840両2分)であった。

『仮名手本忠臣蔵』、『多胡主水伝』、『石見物語』などによると、以下のように伝えられている。元禄11年(1698)、亀井茲親は伝奏役の勤めの際に、高家吉良上野介より侮蔑的な扱いを受け、吉良を討つと激怒した。この間の事情を察した家老の多胡真蔭は一両日待ってほしいと主君に告げ、絹織物、異国の陶磁器、菓子(源氏巻ともいう)に500両の黄金金貨を添えて吉良邸へと赴き、「藩主は田舎育ちで作法もよく存ぜぬため、よろしくお引き回しいただきたい」と伝えた。これにより、翌日以降の上野介の態度は一変し事なきを得たという。

*「丸」…和紙の単位。1丸=6緒=60束=600帖=1,200枚となる。重量は1緒=1貫100匁(約4.125kg)が基準とされた。なお、半紙の大きさは縦8寸(約24.3cm)、横1尺1寸4分(約34.6cm)である。(『日原町史 上巻』P523)

■藩校「養老館」創設

8代亀井矩賢のとき藩校創設が決せられ、天明5年(1785)に大坂より山口剛斎(本名は景德、号は剛斎)が学頭として招聘された。剛斎は闇斎学派の朱子学者で、書・禅・神道・兵学にも通じていた。彼の交友関係には、性理学(哲学)に通じた久米訂斎、国学にも通じた寛政の三博士のひとりである柴野栗山、儒学・国学・神道に通じた服部南郭らがいた。このような学者の影響の下で、万学に通じた剛斎の視野の広い学風は形成され、その後の藩校の校風に少なからず影響を与えた。矩賢は『孟子』の「梁惠王上」に因んで藩校の校名を「養老館」とし、翌天明6年(1786)に津和野城下の中島北端に校舎を建てた。

養老館で教える儒学は官学の朱子学が中心であった。数学教育にも特色があり、藩士の堀田仁助は後に幕府天



津和野藩校養老館(県史跡)

文方に属し、伊能忠敬に先んじて北海道全道の基本地図を作成した。津和野藩の家塾で門下生に数学測量術を教授した。その門下の木村俊左衛門は、藩校の数学・測量術の教授となり、桑本才次郎を育てた。才次郎は養老館數学科の教授となり、自著の養老館出版『尖円軸通』(微積分)をテキストとして教鞭をとった。『尖円軸通』の付録には、パリ大学の懸賞問題と同じ問題が7年も早く掲載されていた。

■権力の正統性を伝統的権威に求め近代日本民族の結集をはかる

11代亀井茲監は養老館の改革を行い、嘉永2年(1849)に国学者岡熊臣を国学教授に抜擢し、国学を養老館の中心教学とするとともに藩校の学則も制定させた。学則には「道は、天皇の天下を治め給う大道にして開闢以来地に墮ちず」と定め、法でも英雄でもなく神武以来の皇統に日本の国家権力の正統性をもたらせた。茲監は、欧米列強のアジア植民地化・半植民地化の波が日本に押し寄せている折から、日本の民族の近代化と結束の理論を国学と伝統的権威である神権的天皇制に求めた。同年、西洋医学科も設置し、『西学入門』(吉木蘭斎著、養老館出版)、ベルリン大学のフーフェラントの『内治全書』を用いるなど、医学を志す藩外の留学生も受け入れた。

茲監は、欧米列強の日本進出の脅威を前に、民族の結集をもとめ、朝廷・幕府へ意見書を上申した。特に茲監は情報網を強化し、三日にあけず全国各地から飛脚・早馬によって1通の全長が5mにも及ぶ報告書を送らせた。幕長戦争(長州征討 1864-1865)のおりには、内乱は避けるべしとして情報分析を確実に行ったほか、藩主の強いリーダーシップと国学者福羽美静らの外交交渉により、ついに一発の弾丸も撃たれることなく戦火が避けられた。

なお、「王政復古」の大号令は、養老館国学教授に復帰していた大國隆正の理論『神祇官本義』をもとに、隆正の門下生の玉松操が草稿を書いたものである。明治初年の政体・二官八省のうち、神祇官副知事(次官)には藩主の亀井茲監、神祇官判事には国学者の福羽美静が、書記には加部巖夫がそれぞれ就任し、神祇官の中核を津和野藩が占めた。

■銅山やたたら製鉄等の産業と暮らし

江戸時代には、銅鉱山を有する日原地区や畠迫地区など五ヶ所村は幕府直轄地となり、銅生産に伴って多くの人々がその一帯で働き、暮らしていた。日原銅山は藤井氏・三好氏、筈谷鉱山は堀氏などの銅山師によって経営されていた。畠ヶ迫村(現、津和野町邑輝)に居住した堀氏は近世から近代にかけて邸宅や庭園を整備し、鉱山労働者等の福利厚生・教育などに地域経営的な視点を持って取り組んでいた。



亀井茲監公



筈谷鉱山跡

日原村は鉱山町や交通の要衝地として繁栄し、産業だけでなく学問や文化的活動が盛んに行われた。特に銅山師三好氏の一族である三好権三は、幕末に日米修好通商条約締結のため派遣された遣米使節の供頭及び通訳として渡米し、使節らとともにアメリカ大統領からメダルを授領している。

また、青原庄屋であった原田氏は、高津川流域における豊富な水と森林資源（薪炭材）を利用して、たたら製鉄を行っていた。川や浜から採れる砂鉄を利用して、高い技術で良質な鉄を大量生産し、最盛期には津和野藩の財政にも大きく寄与したと言われる。特に左鎧地区で盛んに行われており、多くのたたら場の跡が残されている。

4 近現代

■宗教行政の中核に津和野藩

明治新政府は、津和野藩出身の前記の人々を中心に、神道国教化政策を推進し、徳川幕府に継いでキリストを禁令とした。その背景にはキリスト教が孤児の収容や施薬院の設置など信仰とともに民衆の心をつかむ一方、キリスト教国が強力な軍事力により植民地化をはかるなどアヘン戦争と同じ撤を踏むことを恐れたという理由もあった。

明治元年(1868)から同2年にかけ、長崎浦上のキリスト教徒は検挙され、名古屋以西の10万石以上の諸藩へ配流となった。4万3千石の津和野藩は、例外的に配流になる藩の対象となった。高松・松山その他の各藩が100名以下の配流人数であったのに対して、津和野藩は153名の配流となった。津和野藩主や津和野藩の国学者らが神祇官の中核を占め、神道国教化の推進的立場にあったからである。改宗の強要に伴う拷問により、37名もの殉教者を出した場所である旧光琳寺跡には「乙女峠マリア記念堂」が建ち、今日では国際的に著名な場所になっており、殉教者の列聖列福運動が進んでいる。

明治天皇即位式は、政府から任命された津和野藩主の亀井茲監や藩の国学者らが、それまでの中国風の様式を廃し、日本の古典を考証して制定した純日本式の新式にて挙行された。



乙女峠マリア記念堂

■斯界の先哲を輩出

養老館儒学科教官であった西周は「永の暇」をもらい、やがてオランダへと留学した。帰国後には、国際法「万国公法」の翻訳に携わったほか、將軍徳川慶喜のブレーンとして「議題草案」を執筆し、二院制の確立を答申した。維新後、西周は沼津兵学校(徳川家兵学校)頭取(校長)となり、やがて新政府と徳川家の命により兵部省に出仕、軍人のモラルの確立や軍事制度・諸規則の制定に携る一方、哲学による



西周旧居 (国の史跡)

万学の統一を説いた『百一新論』『百学連環』などの著書や私塾での講義により西洋哲学を紹介するとともに、独自の近代的哲学体系の確立を試みた。西周は明六社にも所属して機関紙『明六雑誌』に多くの論文を発表し、日本人の精神の近代化を啓発した。このことにより、西周は日本近代哲学の祖とされる。

明治3年(1870)の太政官布告に基づく貢進生として、津和野藩から学資を得て上京した大学南校（東京大学の前身）に進んだ養老館出身者として小藤文次郎、山辺丈夫、八杉利雄などがいる。

小藤文次郎は日本地質学の祖とされ、彼の地震説と濃尾大地震の根尾谷断層写真は世界の教科書にも紹介された。平成7年(1995)の阪神・淡路大震災を紹介する北淡震災記念公園（兵庫県淡路市）では、今日でも小藤の写真とともに根尾谷断層の写真や地震説がパネルにより紹介されている。山辺丈夫は、西周の私塾やイギリスに学んだ後、日本近代化の要請を受けてイギリスに渡り、紡績業を一職工からのたたきあげで学び取った人物である。帰国後には大阪紡績を興し、社長に就任した後には、それまで輸入が7割を占めていた織物製品を逆に7割を輸出するまでに成長させた。そのような業績により、山辺はわが国近代紡績業の父と呼ばれている。八杉利雄は医学を学んで陸軍軍医となり、森鷗外の上司でもあった。その後、熊本陸軍衛戍病院長となる。その次男貞利はロシア語学者として著名で、ロシア語の父とも呼ばれる。貞利が明治26年(1893)に17歳で津和野を訪れたときの日記『故山日記』には、当時の津和野の情景が克明に記されている。

■全国諸藩に先がけ版籍奉還

日本が強大な中央集権国家として対外政策に当ることを目的として、津和野藩は全国諸藩に先がけて版籍を奉還し、浜田県に合併したため、養老館も廃校となった。養老館の出身者には、前記の人物のほか、北海道帝国大学総長高岡熊雄、島根県出身者ではじめて島根県知事となった高岡直吉らがいた。

文豪森鷗外は養老館最後の在校生で、通学した2年間は学年一番の優等生として賞を得ている。

森鷗外は、『ヰタ・セクスアリス』、『サフラン』、『なかじきり』、『本家・分家』など、10歳までを過ごした津和野の情景や思い出を作品に多く書き残している。文学博士及び軍医総監として大成したのみならず、近代日本の文豪として名を残した。森鷗外は、津和野奨学会理事長として後進の育成にも尽力した。



森鷗外旧宅（国の史跡）

■行政の変遷

明治4年(1871)6月、廢藩により津和野は浜田県に合併された。浜田県では津和野出張所を置き、大野直世・新井宣哉等を官属掛として事務処理にあたらせた。翌明治5年(1872)には県出張所を廃止し、鹿足郡役所を津和野に置いた。後に部区制を敷いた結果、鹿足郡は第五大区となり、明治7年(1874)に養老館跡地に役所が置かれた（現在の津和野町役場津和野庁舎は大正8年(1919)築の郡役所）。その後、郡制は大正15年(1926)まで続き、郡役所は郡内1町11村の行政指導及び地域開発の拠点として機能した。津和野地区には、明治6年(1873)

に警察署が設置されたのをはじめ、その後も明治21年(1888)に登記所が、明治29年(1896)に第二土木管区員分派所(土木事務所の前身)が、そして明治35年(1902)に税務署がそれぞれ設置されるなど、主要な官庁が次々と開設された。

明治7年(1874)には無用となった旧津和野城の建物が解体され、町内の商人に払い下げられた。藩邸の建物の一部は浜田へ移設された。また、藩邸の瓦や板戸についても町民が買い受けるなどして、今日商家などで保存されている。

明治21年(1888)には市町村制が公布され、翌明治22年(1889)4月から実施された。津和野地域においては津和野町・畠迫村・木部村・小川村が誕生し、日原地域においては、日原村・青原村・須川村が誕生した。その後、昭和10年(1935)に日原村と須川村は合併し、昭和21年(1946)に日原町となった。さらに昭和29年(1954)には青原村が日原町に合併し、昭和30年(1955)には津和野地域の3村が津和野町に合併し、平成17年(2005)には平成の大合併により津和野町と日原町が合併し、現在の津和野町が誕生した。

■教育の発展

明治41年(1908)7月、旧養老館を利用して郡立の女学校が開校した。大正4年(1915)には新校舎が養老館の敷地内に完成し、大正11年(1922)には県立の高等女学校となった。また、大正14年(1925)には待望であった県立中学校の建設が着手された。建設費のおよそ16万8千円のうち亀井家が6万円、堀家が2万円を支出したほか、町民などからも多額の寄付が寄せられたとされ、教育に対する意識の高さを感じさせる。藩校養老館の廃止後、ようやく津和野町に中等教育を受ける体制が整い、町民は大いに喜んだという。これらの2校は昭和24年(1949)4月に統合し、現在の県立津和野高等学校となっている。

その他の教育文化施設としては、大正10年(1921)に津和野町郷土館が藩校養老館御書物蔵を利用して開館しており、国内で最も古い地方の公立博物館であった。

一方で、殿町東側の水路には現在も鯉が泳いでいるが、これは民俗学者宮本常一の提案により、昭和9年(1934)に商家の旦那衆の集まり「花草会」によって放されたものである。津和野幼花園に通う子供たちを喜ばせようという当時の人々の発想であったが、それが今日の津和野町の観光に大いに寄与している。

■交通機関の発達



津和野町役場(旧鹿足郡役所)(登録有形文化財)



殿町の水路の鯉



JR山口線SL号

交通関係では、大正 11 年(1922) 8 月、津和野～徳佐間の鉄道敷設工事がようやく完了し、待望の鉄道が津和野町まで開通した。物産共進会や教育品展覧会など様々な祝賀行事が開催され、町民の喜びも非常に大きいものであったと思われる。翌大正 12 年(1923) には津和野～益田間が開通するとともに、山陰本線も益田までが開通した。これによって物資の移動や人々の活動範囲も拡大し、津和野町の生活も大きく変化した。

自動車等の普及により昭和 35 年(1960) から建設が開始された国道 9 号のバイパスは、昭和 40 年(1965) に開通した。江戸時代以来、町の中心を通過していた山陰道は県道となつたが、バイパスの完成によって津和野町の街並みは保存されてきたといつても過言ではない。

■産業の発展

産業の基盤である金融については、明治 12 年(1879) に石見一円を対象とした国立第五十三銀行が津和野に設立されるなど早くから整備が進んだ。

高津川流域は豊かな森林と水に恵まれ、江戸時代にはたたらの生産や「木地屋」と呼ばれる移住者による指物・漆器などの生産が盛んであった。

明治期になると山林の一部が国有化され、明治 42 年

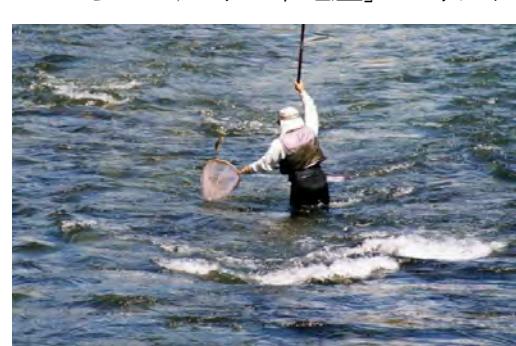
(1909) に枕瀬地区に開設された広島大林区日原製材所を拠点として、大量の木材が産出されるようになった。

江戸時代から盛んであった和紙の生産については、明治 32 年(1899) に製紙伝習所が設けられ、その技術の向上が図られた。大正 5 年(1916) には津和野町改良紙購販生組合が設立され、大正 7 年(1918) には現在の石見製紙株式会社が発足した。

また、この地域では昔から養蚕が盛んで農家で生糸の生産が行われていた。明治期に入り、絹工業の発展をめざして機業伝習所が設けられ、技術の向上が図られた。明治 42 年(1909) には津和野町に田中機業株式会社が設立、昭和 4 年(1929) には日原地区に石西社が設立され製糸業が本格的に始まった。

農村医療の充実を図ろうと青原産業組合が全国に先駆けて大正 8 年(1919) に青原組合医院を設立し、昭和 6 年(1931) には石西利用組合共存病院が設立され、今日の公営の病院へとその意思が引き継がれている。

中世以降続く畠迫地区や日原地区の銅山では、明治期に入り火薬による発掘法がもたらされ、銅の産出量が飛躍的に増加した。さらに洋式の溶鉱炉や蒸気原動力による送風機・捲揚機などの導入により作業の効率化も図られた。明治 25 年(1892) には島根県内でもいち早く発電を行い、工場内だけでなく民家にも配電を行つた。大正期に入り第 1 次世界大戦の特需で銅の産出量も増大した。しかし、その後は海外からの銅の輸



高津川のアユ漁



沢ワサビ (渓流式ワサビ)



茶畑

入も増えて日本の鉱業界は不況となり、^{ささがたに} 笹谷鉱山を除く鉱山の整理が行われ、^{ささがたに} 笹谷鉱山も昭和24年(1949)には廃山となった。

■高津川流域での生業

津和野町の町域すべてが高津川の水系にあたり、古くから高津川の恵みを受けつつ、ときには洪水等に立ち向かい、人々は暮らしと生業を営んできた。

主な生業は、アユなどの川漁と高津川清流、ワサビ生産、稻作と棚田、木材生産及び狩猟と森の景観、茶畠などがある。

川漁についてみると、高津川清流がもたらす環境は、多様な生物を育み、アユ、モクズガニ(別名ツガニ)などは、古くから特産物となっている。特に高津川のアユは、香魚の名にふさわしい香りと味を備え、全国的に名声を得ており、アユ漁も盛んに行われ夏の風物詩でもある。

木材生産についてみると、津和野町(旧日原町)には、かつて日原営林署が置かれ、多くの就労者が働き、木材を生産してきた。営林署が置かれるだけの森林資源があり、その昔は高津川を利用して木材を下流部に移動させていた。また、豊富な木材を利用して木炭の生産も盛んに行われていた。現在も森林組合をはじめ製材を主とした産業が残っている。

また、津和野町は古くから茶の産地である。昼と夜の寒暖の差が大きく、朝霧に包まれる環境は上質なチャノキの育成に適している。高津川水系である津和野川沿いの地形を生かして緑茶の茶畠が広がる。特徴的な茶としてカワラケツメイという自生種を茎ごと炒ってつくる「ざら茶(まめ茶)」は、地域の特産品として広く愛飲されている。

■観光の振興

昭和40年代に入ると国民宿舎「青野山荘」や国民保養センター「つわの荘」が開設され、城山山頂への中国自然歩道やリフトの新設、藩校養老館や西周旧居など歴史文化遺産の修理が行われるなど、観光振興へむけた取組が進められた。

昭和50年代に入ると国鉄のキャンペーンやテレビ、雑誌などで津和野の町が紹介され、観光客が年間約150万人へと増加した。さらに山口線のSL復活や殿町通りの整備など、今日の観光の基礎が築かれた。

平成になると、津和野川の津和野大橋周辺の河川工事や殿町通りから本町通りにかけての道路の美装化(石畳)や道の駅の建設などの大規模事業が行われたほか、森鷗外記念館、^{あんの} 安野光雅美術館などの文化施設の整備・充実に取り組んできた。



森鷗外記念館

<出典・参考>

- 『津和野町史』第4巻(平成17年3月)(松島弘氏執筆)
- 『日原町史 現代』第3編第5章「諸職」(平成17年9月)(村上進氏執)
- 『史跡津和野城跡保存管理計画』(平成24年3月): 第2章「3 津和野町の歴史」(松島弘氏執筆)
- 『津和野町文化財保存活用地域計画』(令和3年7月)

5 津和野に関わりのある人物

■吉見正頼（1513－1588）

中世、津和野地域を治めていた吉見氏の11代。妻は山口の戦国大名大内義興の娘。大内義隆を滅ぼした陶晴賢と敵対し、天文23年(1554)、三本松城の戦いで合戦を行ったが、毛利元就と結び、陶軍を退ける。その後も、毛利元就の陶晴賢討伐に従って山口に攻め込み、晴賢が擁立した大内義長を撤退させるなど、元就の中国地方統一に大きな役割を果たし、毛利家の重臣となった。

弥栄神社の鷺舞神事は吉見氏と大内氏との関係によって、京都祇園会の神事が山口を経て津和野に入ってきたのが始まりである。

■龜井茲矩（1557－1612）

近世の津和野藩主龜井家の祖とされる。津和野藩主龜井家初代政矩の父。

戦国期に出雲地域（島根県東部）を支配した尼子氏の家臣湯永綱の子。毛利氏に滅ぼされた尼子氏の再興をかけ、尼子氏旧臣の山中鹿介（茲矩の妻の養父）とともに織田信長の軍勢に加わって各地を転戦した。その後、羽柴（豊臣）秀吉の配下として天正9年(1581)の鳥取城攻めで功績を挙げ、因幡（鳥取県）の鹿野城を得て、近世初期には鹿野藩主となる。

山陰地方の大名としては唯一、東南アジアとの交易を積極的に行う一方で、内政にも力を入れ、干拓や治水、鉱山経営などを行った。

現在、津和野の盆踊りである「津和野踊」は、天正年間の金剛城（因幡）攻めの際、金剛城のふもとで催された歌舞音曲の祭りに、茲矩の軍勢が武装した上から踊りの衣装をつけて潜り込み、攻め落としたという逸話に由来している。



龜井茲矩木像（永明寺）

■大庭又三郎（?—1778）

小瀬村の百姓で江戸時代中期に用水路や道路工事を主導したとされる人物。詳細な経歴は不明だが、宝暦2年(1752)頃の「小瀬村又三郎覚書」などによれば、享保8～17年(1723～32)には小瀬村の田へ水を引くための用水工事を行い、脇本村から545mに及ぶ用水路を造った。その他、延享4～寛延3年(1747～65)に木原（現益田市）で新田開発のための用水工事、寛延3～明和2年(1750～65)には向横田・高田村・蟠竜湖などの工事、明和5～6年(1768～69)に青原地区の小徳城峠（山陰道）

の工事を行った。又三郎はもとは名字を持っていなかったが、明和2年(1765)に「並庄屋格」となって名字を許され、大庭姓を名乗った。



大庭又三郎顕彰碑（青原駅前）

■堀田仁助（1745–1829）

津和野藩士。藩の蔵屋敷があつた安芸国佐伯郡廿日市（広島県廿日市市）で生れる。幼少期から数学の才能に優れ、15歳で御船手役所見習となる。その後、津和野城下や江戸で関流数学を学んでいたところ、天明2年（1782）から幕府天文方での「公儀暦作御用」を命じられて暦の制作にあたる。寛政11年（1799）、幕府から蝦夷地（北海道）測量を命じられ、江戸から蝦夷地までの航路の開拓と測量を行い、沿岸部の詳細な地図を制作した。これが日本初の蝦夷地測量であり、翌12年の伊能忠敬による蝦夷地東部の陸地測量は仁助の業績なくしては成し得ないものである。文政10年（1827）、津和野へ帰国。その際、8代藩主亀井矩賢へ天球儀・地球儀（太鼓谷稻成神社所蔵、県有形文化財）などを献上し、藩校養老館での教育に活用された。



天球儀・地球儀（太鼓谷稻成神社所蔵）

■岡熊臣（1783–1852）

国学者。木部富長山八幡宮宮司の家に生れる。幼少期から、祖父や父に四書五経や国学を学び、国学者本居宣長の思想に大きな影響を受ける。文化5年（1808）、江戸で本居宣長の門人村田春門に学び、帰国後、国学や和歌に関する書物を多く著す。文化12年（1815）、30歳で自宅に私塾「桜蔭館」を開き、多くの塾生を出す。嘉永2年（1849）、藩校養老館に新設された国学科の教授に抜擢され、養老館の学則を制定した。



岡 熊臣

■大国隆正（1792–1871）

国学者。江戸の津和野藩邸で藩士今井秀馨の子として生れる。子供の頃から日本語に興味を持ち、文化3年（1806）、15歳で国学者平田篤胤の塾に入つて国学を学び、また、幕府が設立した昌平坂学問所で儒学も学んだ。文政元年（1818）には長崎へ遊学、その後、文政11年（1828）に脱藩し、江戸や京都、大坂で私塾を開いて国学を教えた。隆正の学問は「本教本学」と呼ばれ、播磨小野藩や姫路藩、福山藩でも国学の講義を行つてゐる。嘉永4年（1851）、津和野藩へ復籍し、藩校養老館で国学を教授した。藩校養老館の国学は隆正の提言によつて「本学」と改称され、津和野藩における国学は「津和野本学」と呼ばれてゐる。



大国 隆正

■西周 (1829–1897)

明治期の啓蒙思想家、日本近代哲学の父と呼ばれる。藩医西家に生まれる。優秀だったため、19歳のときに藩主から藩医を継がず、儒学に専心するよう命じられて大坂や岡山の藩校などで遊学した。嘉永6年(1853)、江戸勤務となり、浦賀港へのペリー艦隊来航など当時の日本に迫る国際情勢に触れ、蘭学・洋学の必要性を悟って、より広く学ぶために安政2年(1857)脱藩した。翌年、幕府が設置した藩書調所の教授手伝並に任せられ、文久2年(1862)には津山藩の津田真道らとともにオランダのライデン大学に留学。法学、経済学、統計学、哲学などを学び、帰国後は幕府開成所の教授に任命されるとともに、將軍徳川慶喜の側近となっている。明治新政府では兵部省、文部省、宮内省の官僚を歴任し、軍政の整備と軍の精神の確立に功績を挙げ、後に帝国議会の貴族院議員にもついた。一方では森有礼、福沢諭吉らと明六社を結成(明治6年)し、言論活動を展開した。また、西洋思想や学問を紹介し、「哲学」「芸術」「理性」「科学」「技術」などの訳語を考案したことでも知られている。



西 周

■福羽美静 (1831–1907)

国学者。嘉永2年(1849)藩校養老館に入学、漢学や兵学を学んでいたが、藩主の命により国学を専門に修めた。京都へ遊学した後、帰国して藩校の国学教師となったが、幕末の動乱にあたり、京都や大坂で情報収集活動も行っている。明治新政府では神祇官に勤め、宗教政策や明治天皇の即位式の整備にも関わった。また、明治8年(1875)には元老院議官となり立法機関に参画し、明治23年(1890)の帝国議会発足にあたっては貴族院議員になった。



福羽 美静

なお、養子として育てた福羽逸人(1856–1921)は上京して園芸、農学などを学び、宮内省に勤め、新宿御苑で研究に従事した。小豆島のオリーブやイチゴ(福羽いちご)の栽培でも知られる。

■栗本格斎 (里治) (1845–1926)



栗本 格斎

津和野藩士。御数寄屋番として藩主に仕え、茶室の管理などを行う。また、狩野派の絵を学んだ絵師でもあった。明治後期から大正期に、旧藩主龜井家の当主龜井茲常伯爵の命によって、幕末の津和野藩の風景や習俗などを描いた『津和野百景図』を制作して龜井家に献上した。また、その他にも絵巻や城下町絵図など多くの絵画作品を残しており、幕末頃の津和野の様子を知ることのできる歴史資料となっている。

■山辺丈夫 (1851-1921)

旧藩士出身。藩校養老館で学んだ後、明治3年(1870)に上京して福羽美静の私塾培達塾や西周の開いた育英舎で洋学を学ぶ。旧藩主の養嗣子亀井茲明に英語を教授し、明治10年(1877)、茲明の随行としてイギリスに渡る。ロンドン大学で経済学を専攻したが、日本で紡績工場を設立を計画する渋沢栄一の要請によって、ロンドン市内のキングス・カレッジで機械工学を学び、現地の工場で紡績業を実習した。帰国後、渋沢栄一らと大阪紡績会社を設立し、取締役などを務め、明治31年(1898)には社長に就任。大正3年(1914)に三重紡績会社と合併して、東洋紡績会社(現代の東洋紡)が誕生すると、引き続き大正5年まで社長を務めた。



山辺 丈夫

■堀藤十郎 (礼造) (1853-1924)

旧幕府直轄領だった畠迫村の銅山師堀家の15代当主。堀家は江戸時代中期以降、笹ヶ谷銅山の銅山師を務め、幕末頃には銅山師の中でも最上位を占めた。藤十郎は、明治8年(1875)に堀家の当主となって経営を拡大、中国地方一円の鉱山経営に関わり、「中国の銅山王」とも称されたという。明治末期～大正初頃の最盛期には経営に関わった鉱山は中国地方だけでなく、九州から関東地方にまで及んだ。鉱山のほか、電気会社や病院などを設立、また学校や警察署、道路などの建設費用を寄附するなど地域の発展にも尽力した。



堀 藤十郎

■小藤文次郎 (1856-1935)

地質学者。旧藩士の家に生まれ、藩校養老館で学ぶ。明治3年(1870)に14歳で上京、大学南校(東京大学の前身)に入學して地質学を学ぶ。明治13年(1880)から3年間、ドイツに留学して帰国後は東京大学理学部や地質調査所に勤務した。明治24年(1891)に発生した濃尾地震では根尾谷断層を研究して、地震断層の写真を論文に掲載して世界に発表するなど、日本の地質学の発展に貢献した。



小藤 文次郎

■高岡直吉 (1860-1942)

旧藩士の家に生まれ、藩校養老館や浜田の県立英学所で学ぶ。15歳で上京後、官立東京英語学校で学んだが、官費生として札幌農学校に進学。卒業後は北海道の郡長や北海道庁で勤務、その後島根県知事や鹿児島県知事、門司市長などを歴任して、大正12年(1924)には初代札幌市長となった。札幌市長としては、医療施設の充実や上下水道の整備、電車の市営化など札幌市の基盤整備に尽力した。



高岡 直吉

■森鷗外 (1862—1922)

藩医森家に生まれる。幼少期から学問に秀で、藩校養老館に入學するも、明治4年(1871)に藩校が閉校となったのを機に、翌年上京、東京医科大学予科へ入學した。當時13歳だったが、年齢を2歳偽って入學したという逸話が残っている。東京医科大学卒業後は軍医となり、明治17年(1884)、軍の衛生学の調査・研究のためドイツへ留学した。帰国後は陸軍大学や軍医学舎の教官を務める一方、小説「舞姫」を始めとする多数の作品を発表したほか、医学・文学の評論や戯曲の翻訳など多彩な執筆活動を行った。また、大正5年(1917)には帝室博物館の館長、翌年には帝国美術院の院長になるなど近代を代表する知識人である。



森 鷗外

■高岡熊雄 (1871—1961)

高岡直吉の弟。札幌農学校で新渡戸稻造の指導を受ける。ドイツ留学を経て、明治37年(1904)に同校教授となり、農政学や植民学を講義する。大正11年(1922)には再び欧米視察に出て、ブラジルの移民やヨーロッパにおける農業に関する報告書を書いている。昭和8年(1932)に第3代北海道帝国大学総長となり、農業経済学会会長なども務めた。戦後は北海道総合開発委員会の委員長になり、北海道の開発に努めた。札幌名誉市民の称号を受けている。



高岡 熊雄

■伊藤素軒 (1876—1957)

日原の旧家泉屋に生まれる。明治32年(1899)京都へ出て、日本画家今尾景年の門下に入って画家となり、東京で絵を描く。明治41年(1908)から大正2年(1913)まで絵の勉強のためアメリカへ渡り、ボストン美術館にある平治物語絵巻の模写を行うなどした。大正14年(1925)第6回帝展に出品した「池二題」が入選、これ以後、鯉の絵を多く描くようになり、得意とした。



伊藤 素軒

■大庭政世 (1884—1939)

須川村の小山家に生まれ、小瀬村の大庭家の養子となる。京都農学校卒業後、愛知県の農業試験場に勤務したが、明治40年(1907)帰郷して農業に従事することになる。大正7年(1918)、青原村の産業組合長に選任され、販売・購買・生産事業に尽力し、翌年には農業組合の診療所を開設した。この診療所は全国初の産業組合による病院として高く評価されている。また、昭和4年(1929)に鹿足郡6ヶ村の産業組合連合会による組合製糸業として石西社を開業し、養蚕農家が自ら糸



大庭 政世

を販売することで農家を救済し、農村の更生を図った。

■伊沢蘭奢（いざわらんじや）（1889—1928）

津和野出身の新劇女優。津和野町の紙問屋に生まれる。明治43年(1910)、薬種問屋伊藤家に嫁ぎ、長男佐喜雄（後の作家伊藤佐喜雄）が誕生したが、かねてより志していた女優になることが諦められず、離婚して29歳で上京し、近代劇協会に入る。当時著名な劇作家島村抱月や女優松井須磨子が亡くなったことを機に日本新劇協会に移籍し、多くの舞台で大役を演じた。特に昭和3年(1928)に帝国ホテル演芸場などで上演された「マダムX」ではヒロインの蘭子役を演じ、絶賛された。



伊沢 蘭奢

第4節 文化財の現状と特性

1 指定・選定及び登録文化財の状況

津和野町の指定・選定の文化財は、令和3年(2021)5月末現在、国指定が9件、国選定が1件、県指定が17件、町指定が25件であり、合計52件である。その内訳は下表に示すとおりである。

上記以外に国の登録有形文化財（建造物）が17件（56棟）、登録記念物（名勝地関係）が5件ある。

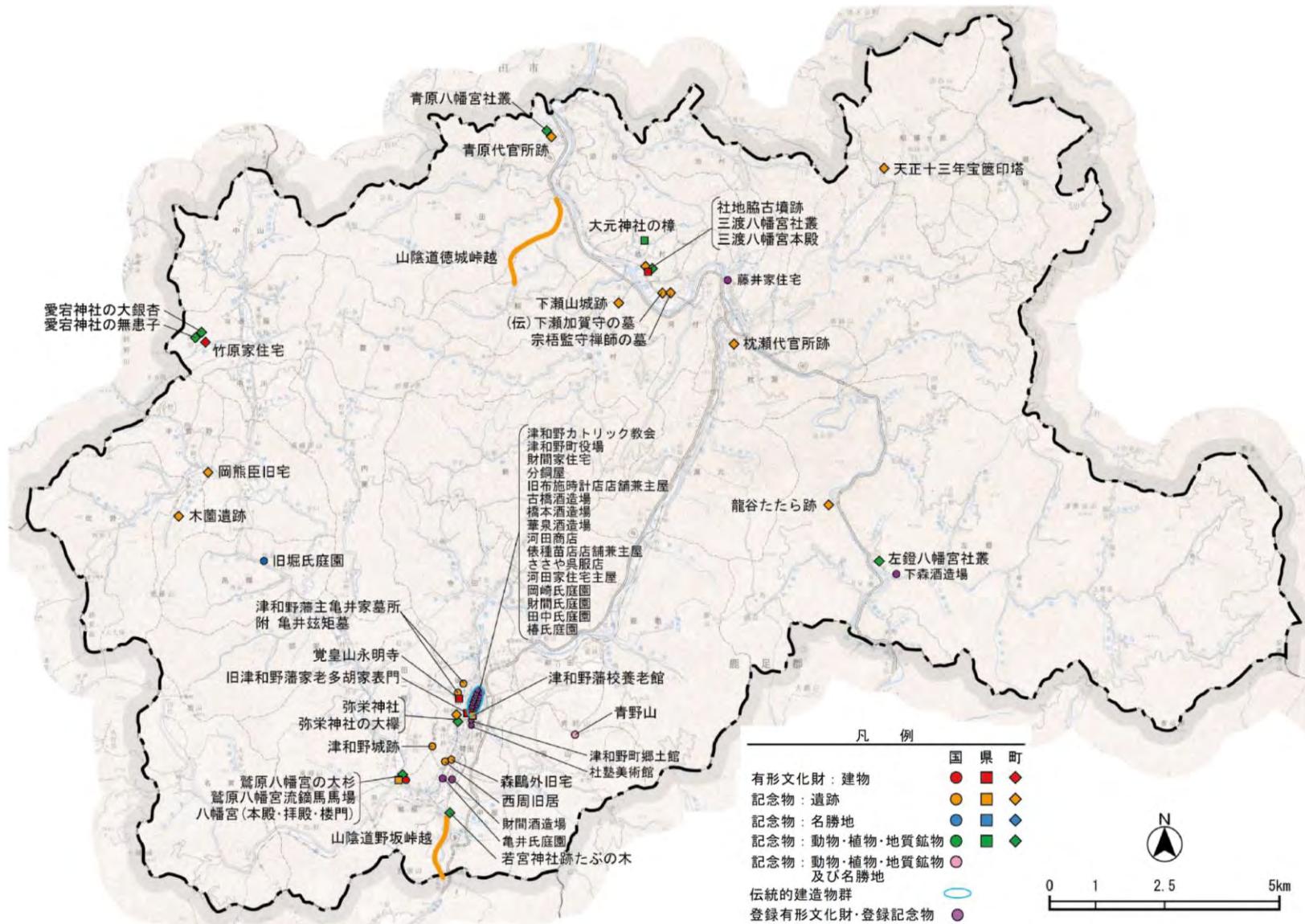
津和野町の指定等文化財の特徴としては、有形文化財（建造物）や史跡、民俗文化財が旧城下町一帯に集積し、その北側の一部は重要伝統的建造物群保存地区に選定されていることがあげられる。また、登録有形文化財、登録記念物の多さも指摘できる。さらに、原始・古代、中世、近世、近代の指定文化財が存在し、連綿と続く津和野町の歴史を表している。

文化財の指定・選定・登録等の状況（令和4年(2022)5月末現在）

単位：件

種別	区分	国指定・選定	県指定	町指定	合計
有形文化財	建造物	1	3	1	5
	美術工芸品	0	8	1	9
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	1	0	1
	無形の民俗文化財	1	2	4	7
記念物	遺跡	5	2	11	18
	名勝地	1	0	0	1
	動物、植物、地質鉱物	0	1	10	11
	動物、植物、地質鉱物 及び名勝地	1	0	0	1
伝統的建造物群		(選定) 1	-	-	1
合計		10	17	27	54

登録有形文化財	56棟
登録記念物（名勝地関係）	5件
記録作成等の措置を講ずべき無形 の民俗文化財	1件
日本遺産（国認定）	2件



指定・登録文化財の分布（建造物、記念物、登録有形文化財、登録記念物）

■国指定、選定等文化財

種別	名称		指定等年月日	備考 ※本書での表記
有形文化財	重要文化財 (建造物)	八幡宮 本殿 拝殿 楼門	S47.3.31.(県指定) H23.11.29.(国指定)	鷺原八幡宮
民俗文化財	重要無形民俗文化財	津和野弥栄神社の鶯舞	H6.12.13	弥栄神社の鶯舞
記念物	史跡	津和野城跡	S17.10.14 S 47.5.26 H19.7.26	
		森鷗外旧宅	S44.10.29	
		西周旧居	S62.7.20	
		山陰道 蒲生峠越・徳城峠越・野坂峠越	H17.3.12 H21.2.12	山陰道 徳城峠越・野坂峠越
		津和野藩主 亀井家墓所附 亀井茲矩 墓	H30.2.13	亀井家墓所
	名勝	旧堀氏庭園	H17.7.14	
	天然記念物及び名勝	青野山	R1.10.16	
伝統的建造物群	重要伝統的建造物群保存地区	津和野町津和野伝統的建造物群保存地区	H25.8.7	重要伝統的建造物群保存地区

■登録文化財

種別	名称		指定等年月日	備考 ※本書での表記
有形文化財	登録有形文化財	津和野カトリック教会（2棟）	H8.12.26 H22.7.16	カトリック教会
		津和野町役場（旧鹿足郡役所）	H8.12.26	旧鹿足郡役所
		津和野町郷土館	H20.7.8	
		下森酒造場（7棟）	H20.7.8	
		藤井家住宅（2棟）	H20.7.8	
		財間家住宅（7棟）	H22.7.16	
		分銅屋（4棟）	H22.7.16	
		旧布施時計店店舗兼主屋	H22.7.16	
		古橋酒造場（5棟）	H22.7.16	
		橋本酒造場（3棟）	H22.7.16	
		華泉酒造場（5棟）	H22.7.16	
		河田商店（5棟）	H22.7.16	
		俵種苗店店舗兼主屋	H22.7.16	
		ささや呉服店（4棟）	H22.7.16	
		河田家住宅主屋	H22.7.16	
記念物	登録記念物	杜塾美術館（2棟）	H22.7.16	
		財間酒造場（5棟）	H24.8.13	
		亀井氏庭園	H20.7.28	
		岡崎氏庭園	H25.8.1	
		財間氏庭園	H25.8.1	

		田中氏庭園	H25.8.1	
		椿氏庭園	H25.8.1	

■記録作成等の措置を講すべき無形の民俗文化財

種別	名称	指定等年月日
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	弥栄神社の鷺舞	S48.11.5.

■認定された日本遺産

種別	名称	指定等年月日
日本遺産	「津和野今昔～百景図を歩く～」（津和野町）	H27.4.24.
	「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」（浜田市、益田市、大田市、江津市、川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町）	R1.5.20.

■島根県指定文化財

種別	名称	指定等年月日	備考 ※本書での表記
有形文化財	建造物	旧津和野藩家老多胡家表門 (表門・番所・土塀)	S40.4.1 多胡家表門
		三渡八幡宮本殿 附・棟梁之記 (松材) 1枚	H7.10.27 三渡八幡宮
		永明寺 附・棟札 2枚	S4.2.18 (町指定) H5.12.28.(県指定) 永明寺
	美術工芸品 (絵画)	西周肖像 (高橋由一筆)	S47.3.31
		絹本着色十六羅漢像図	S49.12.27
	美術工芸品 (書跡・典籍)	紺地金字妙法蓮華經安樂行品	S41.5.31 紺地金字妙法蓮華 經安樂行品
		紙本墨書新勅撰和歌集	H5.5.11 紙本墨書新勅撰和 歌集
	美術工芸品 (古文書)	天球儀・地球儀	S49.12.27
		紙本着色日本国地理測量之図 紙本着色東三拾三国沿岸測量之図	S60.4.23 S60.4.23
		石見国絵図	S56.4.23
	美術工芸品 (工芸品)	太刀銘直綱附糸巻太刀拵	H10.3.27
民俗文化財	有形民俗文化財	柳神楽の面と衣装	S42.5.24
	無形民俗文化財	津和野踊	S37.6.12
		柳神楽	S43.6.7
記念物	史跡	鷺原八幡宮流鏑馬馬場	S41.5.31
		津和野藩校養老館	S44.2.18 藩校養老館
	天然記念物	大元神社の樟	S33.7.1 大元神社の樟

■津和野町指定文化財

種別	名称	指定等年月日	備考 ※本書での表記
有形文化財	建造物	竹原家住宅	H18.5.1
	美術工芸品 (歴史資料)	鷺原八幡宮社殿奉納掲額	S52.12.17
民俗文化財	無形民俗文化財	鷺原八幡宮の流鏑馬神事	H8.4.1
		日原奴道中	H30.2.22
		青原奴道中	H30.2.22
		子鷺踊り	R2.11.30
記念物	史跡	木薙遺跡	S54.9.15
		岡熊臣旧宅	H8.12.10
		下瀬山城跡	S41.8.1
		宗梧監守禪師の墓	S41.8.1
		(伝) 下瀬加賀守の墓	S41.8.1
		社地脇古墳	S50.9.5
		天正十三年在銘宝篋印塔	S50.9.5
		龍谷たたら跡	S50.9.5
		枕瀬代官所跡	S50.9.5
		青原代官所跡	S50.9.5
		弥栄神社	R2.11.30
	天然記念物	愛宕神社の大銀杏	S48.10.23
		愛宕神社の無患子	S48.10.23
		弥栄神社の大樺	S48.10.23
		鷺原八幡宮の大杉	S48.10.23
		若宮神社跡たぶの木	S56.4.28
		三渡八幡宮社叢	S50.9.5
		青原八幡宮社叢	S50.9.5
		左燈八幡宮社叢	S50.9.5
		徳次のフクジュソウ群生地	R4.2.4
		徳次のカキノキ	R4.2.4

※町指定の無形民俗文化財であった「奴行列」は保持者である奴行列保存会が解散したため、令和2年(2020)11月30日、指定を解除した。また、町指定の天然記念物であった「安蔵寺山の大ミズナラ」は倒木したため、令和2年(2020)11月30日、指定を解除した。

■ユネスコ無形文化遺産

種別	名称	指定等年月日
無形文化遺産	風流踊（全41件） 津和野弥栄神社の鷺舞	R4.11.30

(1) 国指定・選定・登録文化財

津和野町にある国指定文化財は7件であり、その内訳は重要文化財（建造物）が1件、重要無形民俗文化財が1件、史跡が5件、名勝が1件、天然記念物及び名勝が1件となっている。

重要文化財（建造物）は、鷺原八幡宮の本殿・拝殿・楼門であり、平成23年(2011)11月にそれまでの県指定から建物の再評価により重要文化財となった。

重要無形民俗文化財は、津和野弥栄神社の鷺舞がある。京都の祇園祭のだしものの一つである鷺舞は津和野町で現在まで続いており、夏の旧城下町を彩り津和野町を広くアピールする民俗行事でもある。

史跡は、昭和17年(1942)に指定を受けた津和野城跡がある。この城は中世の山城と近世の城が同じ場所に築かれており、近世の城としては珍しく山の上に築城されているのが特徴的である。また、山陰道が鳥取県の岩美町にある蒲生峠に次いで、津和野町に現存する徳城峠越と野坂峠越が追加指定された。この山陰道は幅4m前後あり、部分的に石敷きされた保存状態の良い、歴史的にも土木遺産としても貴重な文化財である。また、平成30年(2018)には歴代藩主の墓所乙雄山と菩提寺永明寺の一帯が津和野藩主亀井家墓所 附亀井茲矩墓として指定された。ここには、鳥取市に所在する亀井家初代茲矩の墓が含まれている。その他の史跡として、森鷗外旧宅と西周旧居が城下町の中にある。

名勝としては旧堀氏庭園が指定されている。庭園については当然高い評価を受けているが、主屋や客殿についても建造物としての価値も高い。この庭園を造営した堀氏は、室町・江戸時代から昭和の初め頃まで栄えた鉱山師であり、地域に大変貢献した一族であった。

天然記念物及び名勝の青野山は、地質の面で学術的な価値が高く、中世以来、信仰の対象や景勝地として親しまれた、津和野のシンボルとも言える山である。

選定文化財としては津和野町津和野重要伝統的建造物群保存地区が平成25年(2013)に選定された。

また、登録有形文化財が17件56棟、そのうち15件47棟は城下町の範囲にある。さらに、島根県で最初の登録記念物（名勝地関係）として亀井氏庭園が登録されている。



鷺原八幡宮楼門（重要文化財）



津和野弥栄神社の鷺舞（重要無形民俗文化財）



津和野城跡（史跡）



森鷗外旧宅（史跡）



西周旧居（史跡）



山陰道 野坂峠越（史跡）



旧堀氏庭園（名勝）



青野山（天然記念物及び名勝）



亀井氏庭園（登録記念物）

(2) 県指定文化財

津和野町にある県指定文化財は17件であり、その内訳は有形文化財（建造物）が3件、有形文化財（美術工芸品）が8件、有形民俗文化財が1件、無形民俗文化財が2件、記念物が3件となっている。

有形文化財のうち建造物は、江戸時代後期に作られた旧津和野藩家老多胡家表門、江戸時代中期建造の三渡八幡宮本殿、江戸中期の造営で茅葺きが特徴的な永明寺である。また、美術工芸品は、高橋由一の西周肖像画と永明寺に保管されている十六羅漢像図の絵画が2件、紙本墨書新勅選和歌集などの書跡が2件、天球儀・地球儀や石見国絵図などの古文書が3件、工芸品が太刀銘直綱附糸巻太刀拵の1件となっている。

民俗文化財のうち、無形民俗文化財は、衣装が特徴的な津和野踊と六調子でゆっくりとした舞いが特徴の柳神楽。有形民俗文化財は柳神楽の面と衣装が指定されている。

記念物のうち史跡は、流鏑馬神事が行われる鷺原八幡宮流鏑馬馬場と西周や森鷗外が学んだ津和野藩校養老館が指定されている。



旧津和野藩家老多胡家表門（県指定有形文化財）

天然記念物は、大元神社の樟が指定されている。この樟は、樹齢が約500年、樹高約31m、周囲約11mを測り、海成段丘といわれる非常に珍しい地形の中に植生している。



西周肖像画（県指定有形文化財）



津和野藩校養老館（県指定史跡）



鷺原八幡宮流鏑馬馬場（県指定史跡）



大元神社の樟（県指定天然記念物）

(3) 町指定文化財

津和野町が指定した文化財は 27 件であり、その内訳は有形文化財（建造物）が 1 件、有形文化財（美術工芸品）が 1 件、無形民俗文化財が 4 件、記念物が 21 件となっている。

有形文化財のうち建造物は江戸～昭和期まで続いた農家の生活様式を伝える竹原家住宅で、茅葺の住宅である。かつてはこうした農家住宅がたくさんあったが、そのほとんどは解体されており、状態の良い竹原家住宅は、当時の様子をうかがい知ることのできる建造物として貴重である。また、美術工芸品は歴史資料である鷺原八幡宮社殿奉納掲額が指定されている。

無形民俗文化財は 4 件ある。鷺原八幡宮の流鏑馬神事、参勤交代行列を模した日原奴道中、青原奴道中、弥栄神社の鷺舞神事の前に行われる子鷺踊りである。

記念物のうち 11 件は史跡である。発掘調査等で確認された中世津和野城主である吉見氏の最初の拠点であった木蘭遺跡、藩校養老館の先生であった岡熊臣の旧宅、津和野城の最大級の支城で天文の役において落城しなかった下瀬山城跡、青原庄屋の原田家が管理していた大規模な龍谷たら跡などの比較的大きな史跡がある。また、中世の墓として造営された宝篋印塔型の下瀬加賀守の墓や江戸時代の津和野藩の枕瀬・青原代官所跡、鷺舞神事が行われる弥栄神社などが指定されている。

残りの 10 件は天然記念物である。『津和野百景図』でも紹介されている鷺原八幡宮の大杉、愛宕神社の大銀杏、弥栄神社の大樺などの 6 本の巨木がある。また、三渡八幡宮、青原八幡宮、左鎧八幡宮の社叢といった境内全体が天然記念物として指定されているものもある。



竹原家住宅（町指定有形文化財）



下瀬山城跡本丸（町指定史跡）



左鎧八幡宮社叢（町指定天然記念物）



弥栄神社（町指定史跡）

2 未指定・未登録文化財

平成 20 年度(2008)から平成 22 年度(2010)に実施した文化財総合的把握モデル事業では、文化財類型に基づき、未指定・未登録の文化財の調査も実施し、地元調査員による調査カードの作成、公民館でのワークショップやヒアリングなどを通じて、指定・未指定を含め約 1,200 件の文化財の調査を行った。その成果については、「文化財総合的把握モデル事業 津和野町文化財所在地一覧」にまとめた。

その後、津和野町文化財保存活用地域計画の作成にあたり、平成 31 年度(2019)から令和 2 年度(2020)に津和野町歴史文化遺産調査を行い、新たに未指定文化財約 300 件を確認した。これにより未指定等文化財として約 1,500 件を把握している。

未指定文化財の調査件数と文化財種別ごとの集計（平成 20 年度(2008)～令和 2 年度(2020)の調査）

地 区	把握した未指定文化財 (調査カード作成件数)	概要 (一部紹介)
津和野(後田)	208	・伊沢蘭奢(1889～1928)の墓:伊沢は日本の新劇女優 ・鷺舞碑(弥栄神社境内):約 1.2m の自然石の碑 など
津和野(後田以外)	209	・芭蕉句碑 　・岡野益清・春清の墓:画人 ・高崎亀井家屋敷跡・裏門石垣 など
木部	255	・鉱滓の出土地 ・吉見一族の居館跡 　・吉見家の墓:宝篋印塔など
畠迫	127	・山城跡:寺山城跡 ・畠ヶ迫銀銅山 　・ゲンジボタルなど
小川	145	・青野山爆裂火口跡 　・青野山王権現 ・芭蕉句碑 　・麓耕子安觀音・觀音堂 など
日原	173	・カブトエビ、ホウネンエビ 　・アマナ(ユリ科の植物)の群生地 ・柳の舞:三十数通りの舞 など
青原	78	・原田家の墓 ・青原鉱山跡、新金山鉱山跡、柳珪石鉱山跡 　・棚田 など
左鎧	79	・日原発電所、左鎧発電所跡 　・たら跡:数多く分布 ・布さらしの滝、畳岩 　・畳鉱泉 　・わさび発祥の地 など
須川	42	・鎌絵:龍、鶴と亀 ・峠:津和野奥筋往還門松峠、笛ヶ峠、七曲がり峠、地蔵峠など
津和野地域	122	周知の埋蔵文化財 　・土居丸館跡など
日原地域	52	周知の埋蔵文化財 　・日原遺跡など
合計	1,490	

地域	区域	有形文化財	無形文化財	民俗文化財	記念物	文化的景観	伝統的建造物群	その他	小計	周知の埋蔵文化財	合計
津和野	津和野(後田)	55	3	3	141	2	0	4	208	122	1066
	津和野(後田以外)	45	1	1	160	0	2	0	209		
	木部	50	1	7	191	3	1	2	255		
	畠迫	17	0	11	97	2	0	0	127		
	小川	18	0	16	108	3	0	0	145		
日原	日原	47	0	8	111	6	0	1	173	52	424
	青原	24	0	2	51	1	0	0	78		
	左鎧	20	0	4	51	2	0	2	79		
	須川	6	0	2	33	0	0	1	42		
	合計	282	5	54	943	19	3	10	1316	174	1490

こうした未指定文化財等について、今後とも、住民等の協力を得ながら、持続的に文化財の把握等に取り組むとともに、未指定等を含む文化財やその保護に関する住民等への情報提供や啓発に努める。また、未指定・未登録文化財の中から指定・登録文化財候補を選定し、今後専門的な調査を実施する計画である。

以下、その中の幾つかを紹介する。

建造物の候補としては、城下町内にある剣玉神社本殿、日原幕領内にある春日大社本殿、旧宿場町にある青原八幡宮本殿、木部地区にある千原山八幡宮本殿、名賀地区にある愛宕神社本殿などの神社が挙げられる。



青原八幡宮本殿



愛宕神社本殿

また、部栄地区にある西光寺、日原幕領内にある丸立寺、横道地区にある鎮蔵寺などの寺院、さらに商家やその蔵、JR山口線のSL転車場・鉄橋・トンネルなどの鉄道遺産などが挙げられる。



鎮蔵寺



JR山口線

史跡の候補は、亀井家の分家であった高崎亀井家の屋敷跡、木部地区にある津和野城の重要な支城の一つである御嶽城、江戸時代幕領として管理されていた笹ヶ谷鉱山跡、キリスト教施設である乙女峠のマリア聖堂などが挙げられる。



高崎亀井家の石垣



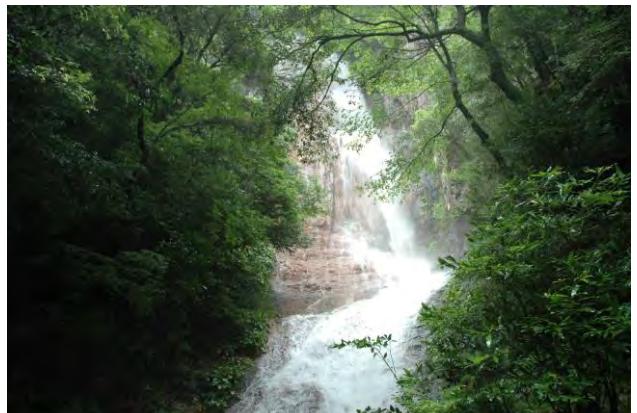
笹ヶ谷鉱山古写真

美術工芸品の候補としては、栗本格斎が書いた「津和野城下町絵図」や『津和野百景図』、堀田仁助による北海道までの沿岸地図「従江都至東海蝦夷地針路之図」等、藩主亀井家に伝來したフランキ砲、津和野藩邸で使用されていた板絵、藩校養老館の教科書類一式、仏像類、鉱山師であった旧堀家文書などが挙げられる。

天然記念物の候補としては、『津和野百景図』にも選ばれている滝元地区にある雄滝と雌滝、高田地区にある白糸の滝などが挙げられる。



白糸の滝



雌滝

3 特產品、料理等

(1) 源氏巻

津和野の代表的な名菓「源氏巻」はカステラ状の生地で餡を巻いた菓子である。一説には、幕末の津和野藩主が「源氏物語」から名づけたとも伝えられているが、町が所蔵する民俗資料に万延元年（1860）の刻印のある源氏巻の包み紙の版木があることから、この時期にはすでに作られていたことがわかる。

現在、源氏巻を製造しているのは9軒ほどであるが、なかには明治期に創業した店舗もあり、手土産や茶菓子として津和野では古くから親しまれてきた和菓子である。



源氏巻

(2) 芋煮

青野山（天然記念物及び名勝）の山麓にある笠山集落の火山灰土質によって育てられた、粘り気の強いサトイモを利用した古くからの郷土料理。干した小鯛のあぶりから出汁を取り薄口醤油を使用し、サトイモのみを煮込んだ上に柚子の皮がのせられており、上品な見た目と風味の料理となっている。松林山天満宮に残されていた嘉永2年(1849)の奉納額には宴で芋煮を食べている様子が描かれている。現在も秋には町内の小売店でサトイモや小鯛が並び、家庭でも、小料理屋や旅館などでも、もてなしや酒席の肴に出される料理である。古くから津和野では毎年十五夜の観月会を「芋煮の宴」として酒を酌み交わす習慣があり、近年では、日本三大芋煮（津和野町、山形県中山町、愛媛県大洲市）の一つにも数えられている。



芋煮

(3) うずめ飯

春かぐら（正月5日頃に集落の者が氏神に参拝した後に祝宴をする集まり）に出された郷土料理。江戸時代に起源を持つともされるが定かではない。かまぼこ、ニンジン、豆腐、セリなどを煮たものを煮汁とともに茶碗に入れ、上からごはんをのせ、あぶった海苔やワサビを入れて食べる。近年では、津和野名物として観光客向けに飲食店でも提供されており、さまざま人々に親しまれている。



うずめ飯

4 ユネスコ無形文化遺産

(1) 「風流踊」 津和野弥栄神社の鷺舞

風流踊は華やかな、人目を惹く、という「風流」の精神を体现し、衣装や持ち物に趣向を凝らして、歌や、笛・太鼓・鉦などの囃子に合わせて踊る民俗芸能である。除災や死者供養、豊作祈願、雨乞いなど安寧な暮らしを願う人々の祈りが込められている。この風流踊は全国各地で、それぞれの地域の歴史と風土を反映し、多彩な姿で今日まで続いてきた。

こうした各地の風流踊のうち、国の重要無形民俗文化財に指定されている 41 件が、令和 4 年(2022)11 月 30 日にユネスコの無形文化遺産一覧表へ登録された(平成 21 年(2009)に登録されたチャッキラコ(神奈川県三浦市の民俗芸能)の拡張登録)。この中に津和野弥栄神社の鷺舞が含まれている。

津和野弥栄神社の鷺舞は、毎年 7 月 20 日と 27 日の弥栄神社の祭礼(祇園祭)に行われる民俗芸能で、中世吉見氏の時代に山口の大内氏を通じて、京都祇園祭の鷺舞が伝承したとされる。幕末の津和野の情景を描いた『津和野百景図』(明治末～大正初期)などの歴史資料にも描かれている。鷺役者の 2 名が高さ約 85 cm の雌雄の鷺頭と、大中小の 3 種の羽 39 枚でできた鷺羽を身につけて舞い、太鼓・鐘・小鼓・笛の囃方、唄方によって構成される。鷺舞は京都や山口などの他地域でも行われていたが、断絶したところも多く、古来の姿が最もよく現代に継承されているとして、平成 6 年(1994)に国の重要無形民俗文化財に指定されている。



『津和野百景図』「第十七図 祇園会鷺舞」と現代の鷺舞神事

5 日本遺産の認定

地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定する「日本遺産」制度は、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある様々な有形・無形の文化財群を総合的に活用するものである。

津和野町では平成 27 年(2015) 4 月に「津和野今昔～百景図を歩く～」が、令和元年(2019) 5 月に「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」(浜田市、益田市、大田市、江津市、川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町)が、日本遺産に認定されている。

(1) 「津和野今昔～百景図を歩く～」

絵師栗本格斎が幕末の津和野藩の風景等を記録した『津和野百景図』(明治末～大正初期成立)には、藩内の名所、自然、伝統行事、芸能、風俗、人情などの絵画と解説が 100 枚にわたりて描かれている。明治以降、不斷の努力によって町民は多くの開発から街を守るとともに、新しい時代の風潮に流されることなく古き良き伝統を継承してきた。津和野は 100 枚の絵に残された当時の様子と現在の様子を対比させつつ、往時の息吹が体験できる稀有な城下町として、平成 27 年(2015) 4 月に認定された。

『津和野百景図』に描かれた対象は、旧津和野藩全域に広がっているが、構成文化財の多くが津和野城を中心として南北約 3 km、東西約 1.5 km 四方に集中している。津和野出身の文豪森鷗外や啓蒙思想家西周らが見てきた幕末の風景に今も出会えるのはもちろん、百景図の絵を通して感じられる水や風の音、自然の醸し出す匂い、当時の生活文化を直接肌で感じられることが最大の魅力である。



『津和野百景図』「第一図 三本松城（津和野城）」と現在の津和野城（人質櫓）

(2) 「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」

島根県西部である石見地域一円に根付く神楽は、地域の民俗芸能でありながらも、時代の変化を受容し発展を続けてきた。その厳かさと華やかさは、人の心を惹きつけて離さない。神へささげる神楽を大切にしながら、現在は地域のイベントなどでも年間を通じて盛んに舞われ、週末になればどこからか神楽囃子が聞こえてくる。老若男女、観る者を魅了する石見地域の神楽は古来から地域とともに歩み発展してきた、石見人が世界に誇る宝であるとして、令和元年(2019) 5 月に認定された。

石見地域は人口が減少し、全域の人口がわずか 19 万人でありながらも、神楽団体（社中・保存会等）が 130 を超えて存在し、それぞれの地域で伝承されてきた舞を守り続けるとともに

に、時には新たな舞を創造している。現在では神社祭礼での奉納やイベントでの上演にとどまらず、照明や音響効果を取り入れたホールでの公演や、現代アーティストとコラボするなど、新たな「魅せる」挑戦をしている。その一方で昔ながらの舞を楽しもうという伝統を守るために取り組みも行われており、石見地域の神楽の持つ多様性、時代に寄り添う柔軟性も人々の心を惹きつける魅力となっている。

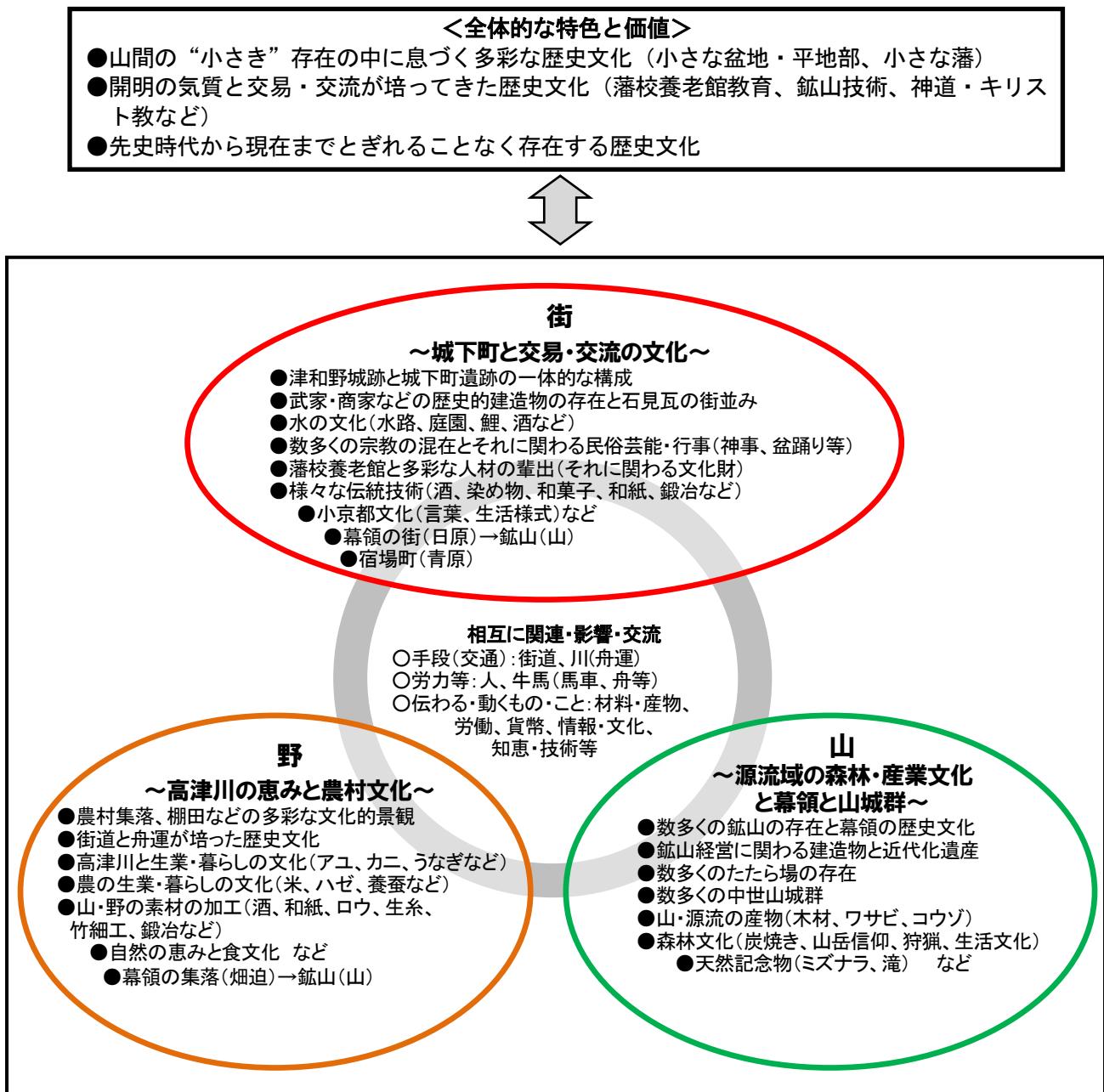


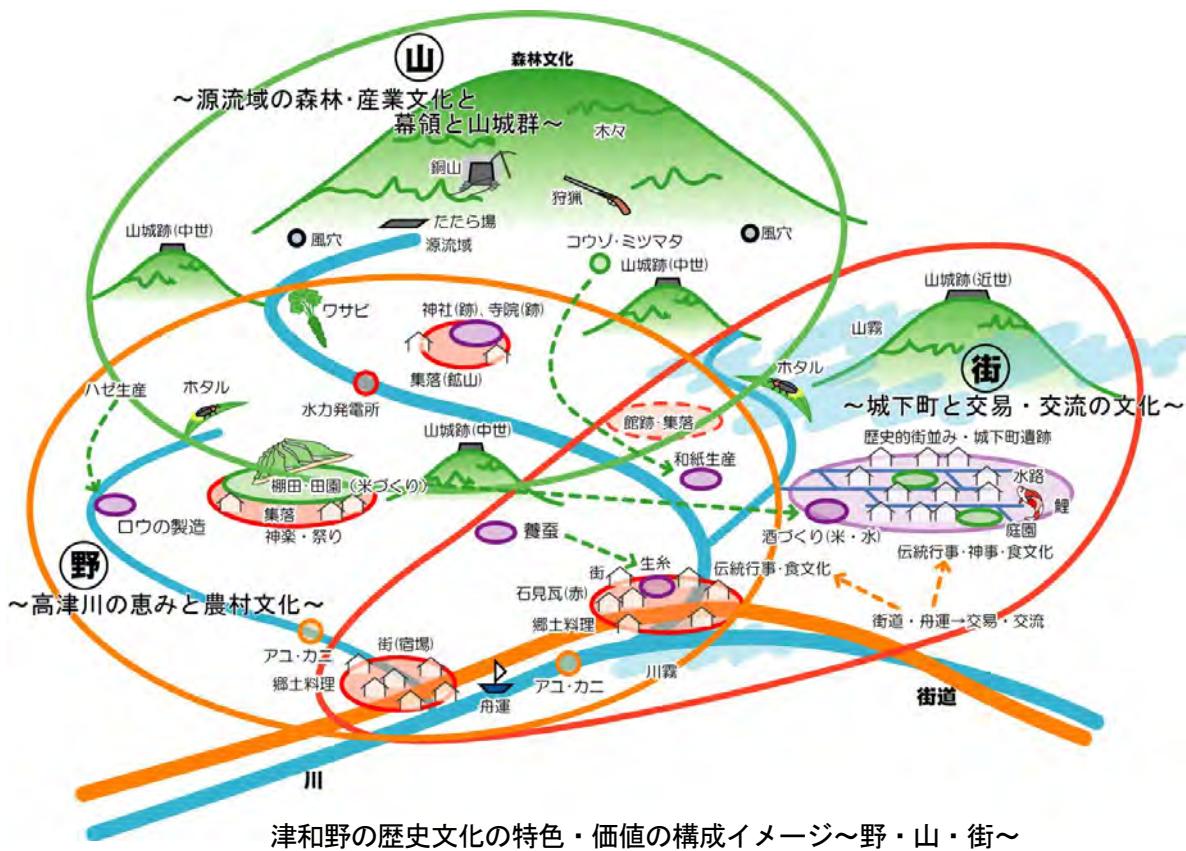
津和野町内の構成文化財 柳神楽と三渡八幡宮

6 津和野町の文化財の特色と価値

津和野町の歴史文化の特色と価値を個別的に取り上げ、さらに共通する視点（切り口）で大きく区分すると、以下のように全体的な特色と価値とともに“野”、“山”、“街”といったキーワードでくくることができる。

また、それぞれの区分は相互に関連・影響し合っていることになる。





(1) 全体的な特色と価値

●山間の“小さき”存在から生まれた多彩な歴史文化（小さな盆地・平地、小さな藩）

津和野町は、山間の盆地や平地、斜面地に街や集落を築いてきた地域であり、いずれも小規模な空間で、それらが地域の中に点在し、地形的には川がつなぐような構造となっている。

また、近世においては、津和野藩が置かれた地域であるが、4万3千石の小藩であった。

このように地形的にも、藩の規模の面でも“小さき”存在であったものの、幕末の激動期における教育改革によって、多分野において数多くの人材を輩出し、とりわけ幕末から明治においては歴史的な使命を担い、その歴史と文化が息づく地域である。

●開明の気質と交易・交流が培ってきた歴史文化

津和野町は、決して恵まれてはいるとはいえない環境にありながらも、そこに生きる人々は川や森、自然の恵みを利用し、生かしながら、暮らしや地域を築いてきた。

また、山間の厳しい条件を克服するように、街道や舟運を通じて、活発な交易・交流を行い、各地の情報や技術を吸収してきた。こうしたことは、世の中の状況や時代の流れに対する鋭敏さにつながり、教育や個の充実の重要性を認識し、藩校養老館に代表される先駆的な人材育成に取り組み、その風土を引き継いできた。その結果、数々の人材を輩出し、それぞれの時代と次代を築いてきた。

いうならば津和野町は、風土を生かし、克服しながら、開明の気質を持って営んできた歴史と文化が息づく地域である。

●先史時代から現在までとぎれることなく存在する文化財

津和野町には、縄文・弥生から古代、中世、近世、そして近代・現在に至るまで、各時代の文化財が、数多く存在する。また、歴史的に培われた農業や林業、伝統産業といった

生業、そして食文化や習俗、民俗芸能なども息づいている。

まさに、先史時代から現在まで、文化財がとぎれることなく存在し、現在においても、生活の中に様々な時代の歴史文化が息づいている地域である。

(2) 「街」に関わる特色と価値～城下町と交易・交流の文化～

●津和野城跡と城下町遺跡の一体的な構成

津和野城跡は、全国的にも希有な近世の山城跡であり、山城の居館を構成していた櫓が残っているのは津和野城跡だけである。

また、城下町を構成していた建造物が数多く残り、城跡と旧城下町が一体的に残っている。

●武家・商家などの歴史的建造物の存在と石見瓦の街並み

旧城下町には、その時代の武家・商家などの建物が残り、また、明治以降の歴史的な建物も多数残っている。

また、建物の大半が石見瓦（赤瓦）を使用しており、街並みの景観を特徴づけている。

旧城下町のうち、橋北地区の殿町から祇園丁及び新丁通り、万町通り一帯の 11.1ha が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

●水の文化

藩校養老館前などには往時の水路が今も残り、鯉が泳ぎ、観光資源にもなっている。その他、現在は、水路の蓋掛けなどで見ることは少なくなっているが、地下には水路網の遺構が残っている。

また、旧城下町の民家（商家など）では、京都の文化を取り入れた庭園が、煎茶文化などとともに暮らしを彩り、水を生かした酒づくりなどの生業も今に引き継がれている。

●数多くの宗教の混在とそれに関わる民俗芸能・行事

津和野地区は、小規模な地域であるものの、神道、仏教、キリスト教が根づき、それに関わる神事や盆踊り、乙女峠まつりなど数多くの民俗芸能や行事が行われている。

また、旧城下町以外の地域においては、町指定の無形民俗文化財である日原奴道中と青原奴道中などが継承されている。
にちはらやっこどうらちゅう あおはら
やっこどうらちゅう

なお、キリスト教については、列福（ローマ教皇庁に福者として列せられる人物）の調査が津和野町についても進められており、本計画期間には決定すると考えられる。

●藩校養老館と多彩な人材の輩出（それに関わる文化財）

近世においては、津和野藩に養老館が設置され、そこにおける教育により、多くの人材を輩出した歴史がある。

現在も藩校養老館の建物等（県の史跡）や森鷗外旧宅、西周旧居、関係する文書・資料などが残っている。

●様々な伝統産業

津和野地区には、自然の恵みを生かした酒や和紙づくり、染め物、農耕を支えてきた鍛冶、京都の文化の影響を受けた和菓子づくりなどが継承されてきている。

●小京都文化（言葉、生活様式）

津和野地区は、歴史的に京都の文化を取り入れた地域であり、言葉や生活様式にその影響がみられる。

生活様式に関しては、前述の庭園や和菓子に加え、煎茶の文化が今も暮らしに息づいて

いる。

●幕領の街（日原）

日原地区は、銅山があることから、江戸幕府の直轄領（幕領）となり、また、高津川の舟運や奥筋往還といった交通基盤、養蚕・製糸や精蠅などの産業もあり、発展した歴史を持つ。

現在では、近世の建物はなくなったが、街は引き継がれ、石見瓦の家並みと高津川、そして周囲の緑が景観を特徴づけている。

●宿場（青原）

青原地区は、山陰道と高津川の舟運の結節点にできた宿場であり、代官所もあった。また、交易・交流の要衝であったことから、現在では、水害による再整備が行われたことや人口減少もあり、宿場の街並みとしては残っていないが、往時と同じ場所に建っている家や青原八幡宮、石造物、そして民俗芸能などを通じて、かつての賑わいや暮らしを知ることができます。

（3）「野」に関わる特色と価値～高津川の恵みと農村文化～

●農村集落、棚田などの多彩な文化的景観

津和野地区には、山間の小規模な平地や斜面地を生かした農村集落や棚田が、散在する形で数多く存在する。

これらは、農地や川、周辺の山、森と相まって、それぞれに固有の文化的景観を形づくっている。

●街道と舟運が培った歴史文化

津和野町には、史跡に指定された山陰道（徳城峠越・野坂峠越）があり、さらに、津和野・廿日市街道、奥筋往還などの歴史的な道を確認することができる。また、清流高津川は、支流を含め舟運によって人・物などが行き交い、地域を支え・発展させた歴史を持つ。

このように津和野町は、街道と舟運による交易・交流によって、歴史文化が培われてきた地域である。

●清流高津川と生業・暮らしの文化

清流高津川は、アユ、カニ、ウナギなどの豊かな川の恵みをもたらしてきた川であり、漁労や食文化などをはぐくんできた。

現在でも伝統的な漁やその道具などが残り、アユ釣りは風物詩になっている。また、豊かな森林を背景に営まれたたら場の跡が多数存在するほか、清流に育まれた沢ワサビもあり、ワサビは津和野町の特産品となっている。

●農の生業・暮らしの文化

決して恵まれているとはいえない地形条件の中で、自然を生かし培われながら、米づくりが行われ、ハゼ、養蚕などの生業が営まれてきた。また、柳神楽（県無形民俗文化財）と柳神楽の面と衣装（県有形民俗文化財）、地芝居・農村歌舞伎、田植え囃子なども継承されている。

●山・野の素材の加工

津和野町には、米、木材・竹、ハゼ、まゆ、鉄など、山と野の生産物（素材）を生かした酒、和紙、竹細工、ロウ、生糸、鍛冶、炭焼き（木炭）などの生業が生まれてきた。

これらのうち、ロウや生糸の生産、鍛冶などは現在行われなくなつたが、多数の民俗文

化財等が残され、鍛冶に使う鉄を生産していたたら跡は各地で確認され、龍谷たら跡は町指定の史跡となっている。生糸に関しては、特に日原地域で養蚕業が盛んであったことから、道の駅「シルクウェイにちはら」の名称の由来ともなっている。また、前述のように酒蔵が旧城下町に位置し、ロウを収蔵し商っていた商家も登録有形文化財となっている。

●自然の恵みと食文化

津和野町は、川や農、山の恵みが地域で生み出され、交易・交流によって海産物や京都の食文化ももたらされた地域である。また、豊かな森を背景に、鳥獣の肉食文化もはぐくまれてきた。

小鯛で出汁を取る津和野独特の芋煮は日本三大芋煮（津和野町、山形県中山町、愛媛県大洲市）の一つに数えられ、おかずを御飯の下にした「うずめ飯」、鮒のアラとスイバ（タデ科の多年草で酸味がある）を煮込んだ「すいば汁」も郷土料理として伝えられている。加えて、『源氏物語』に由来すると伝えわる「源氏巻」は津和野を代表する特産品となっている。

●幕領の集落

畠迫地区は、山間の山村または農村集落といえるが、近くに笹ヶ谷銅山があったことから江戸幕府の直轄領（幕領）となり、発展した歴史を持つ。

鉱山師（経営者）であった堀氏は、鉱山だけではなく、畠迫の生活の場の整備も進めた。

（4）「山」に関わる特色と価値～源流域の森林・産業文化と幕領と山城群～

●数多くの鉱山の存在と幕領の歴史文化

津和野町には、笹ヶ谷銅山や日原銅山など、数多くの鉱山があり、地域の歴史文化を培ってきた。

笹ヶ谷銅山については、中世・近世・近代と操業を続け、鉱山師（経営者）であった堀氏の庭園などは名勝に指定されている

日原銅山については、江戸時代は幕領（幕府の直轄領）であり、周囲が津和野藩の中にあって、独自の生活と文化が培われていた。

●鉱山経営に関する建造物と近代化遺産

笹ヶ谷銅山は、長い間操業を続けた鉱山であり、多くの人々が働き、地域での暮らしが営まれてきた。鉱山師（経営者）であった堀氏は、鉱山だけではなく、生活の場の整備も進め、庭園や関係する建造物、畠迫病院は名勝に指定されている。

また、水力発電所の建設も行い、前記の病院とともに近代化遺産と位置づけられる。

●数多くのたら場の存在

津和野町の豊かな森林（特に左鎧地区）は、たら場製鉄の基盤であり、近代製鉄が導入されるまでは、盛んに行われていた。

現在、たら場跡は、樹木に覆われた状態ではあるが、左鎧地区を中心に数多く存在する。そのうちの龍谷たら跡は町指定史跡となっている。

●数多くの中世山城群

津和野町においては、弘安5年（1282）の吉見氏の入部以降、蒙古の再襲来に備え、築城が始まり、戦国期を含め、多数の山城が築かれた。

なお、津和野城は、吉見氏が築城を始め、その後、近世に入り坂崎氏、亀井氏に引き継

がれたものであり、近世山城であると同時に、中世に築かれた部分も存在する。

●山・源流の産物

津和野町には、豊かな森林があり、源流域が形づくられ、その地域では、木材が生産され、紙の原料であるコウゾ・ミヅマタ、ワサビが生産されている。

こうした山や源流の産物は、それ自体や生産過程が文化であると同時に、地域の生活文化と一緒に存在する。

●森林文化

山や源流、そこから生まれる産物は、地域の暮らしを支え、生活文化につながっていく。

津和野町では、炭焼きや狩猟がわずかながらも引き継がれ、炭窯の跡も確認できる。また、山岳信仰は暮らしの中に息づいている。また、豊かな森林資源を背景に、江戸時代には「木地屋」と呼ばれる移住者による指物や漆器などの生産が盛んであったことから、今でもそれら生産品が町内各地の家々などに残されている。

●自然

津和野町には、島根県下（県境以外）で最も高い安蔵寺山が位置し、豊かな森林や源流域があり、そこにはミズナラの大木やブナの原生林や滝がみられ、それらは信仰の対象ともなっている。

また、その中には、多種多様な動植物が生息・生育している。

第5節 津和野町の関連文化財群と歴史文化保存活用区域

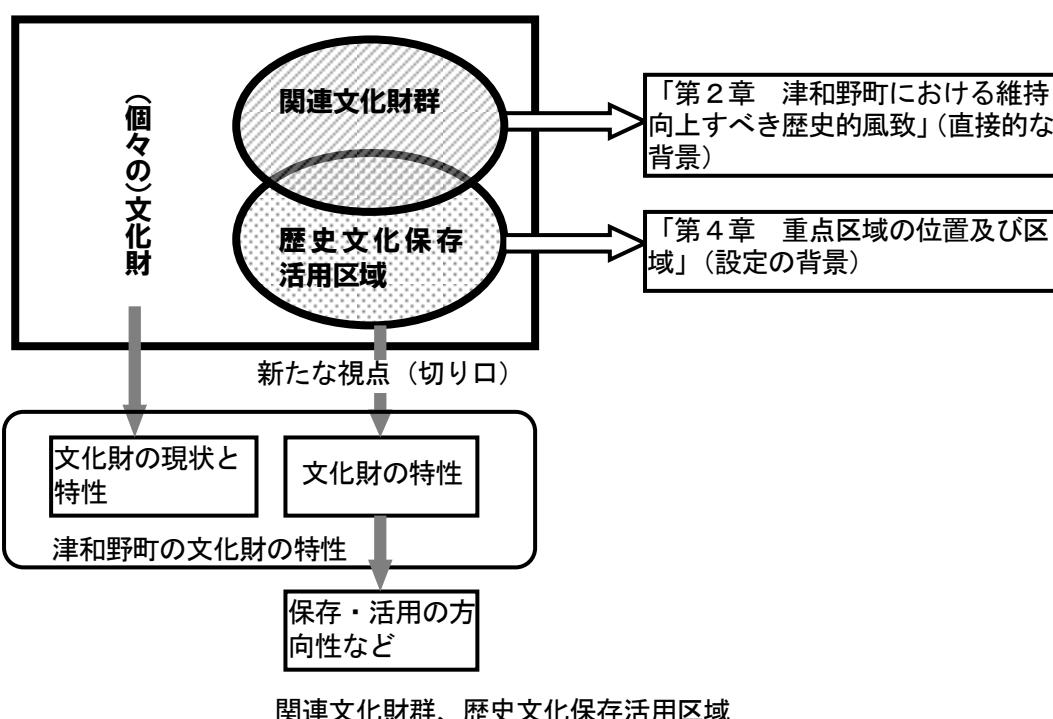
「津和野町歴史文化基本構想・保存活用計画」・「津和野町文化財保存活用地域計画」では、「関連文化財群」と「歴史文化保存活用区域」を設定している。

この2つの観点は、津和野町の文化財の特性と合わせて、その保存・活用における新たな切り口を含むものである。また、「相互に関連性のある一定のまとまり（関連文化財群）」や「関連文化財群や単体の文化財と一体となって価値をなす周辺の環境（歴史文化保存活用区域）」といった考え方は、歴史的風致につながるものである。

このため、津和野町の歴史的風致の全体的な背景として、「津和野町歴史文化基本構想・保存活用計画」及び「津和野町保存活用地域計画」で明らかにした「関連文化財群」と「歴史文化保存活用区域」の概要を示す。

このうち「関連文化財群」については、「第2章 津和野町における維持向上すべき歴史的風致」を見いだす直接的な背景であり、前提となる。

また、「歴史文化保存活用区域」は「第4章 重点区域の位置及び区域」の設定の背景となる。



1 関連文化財群の設定

有形・無形、指定・未指定を問わず、地域に存在する様々な文化財を、歴史的、地域的関連性等に基づいて、一定のまとまりとして設定するものである。

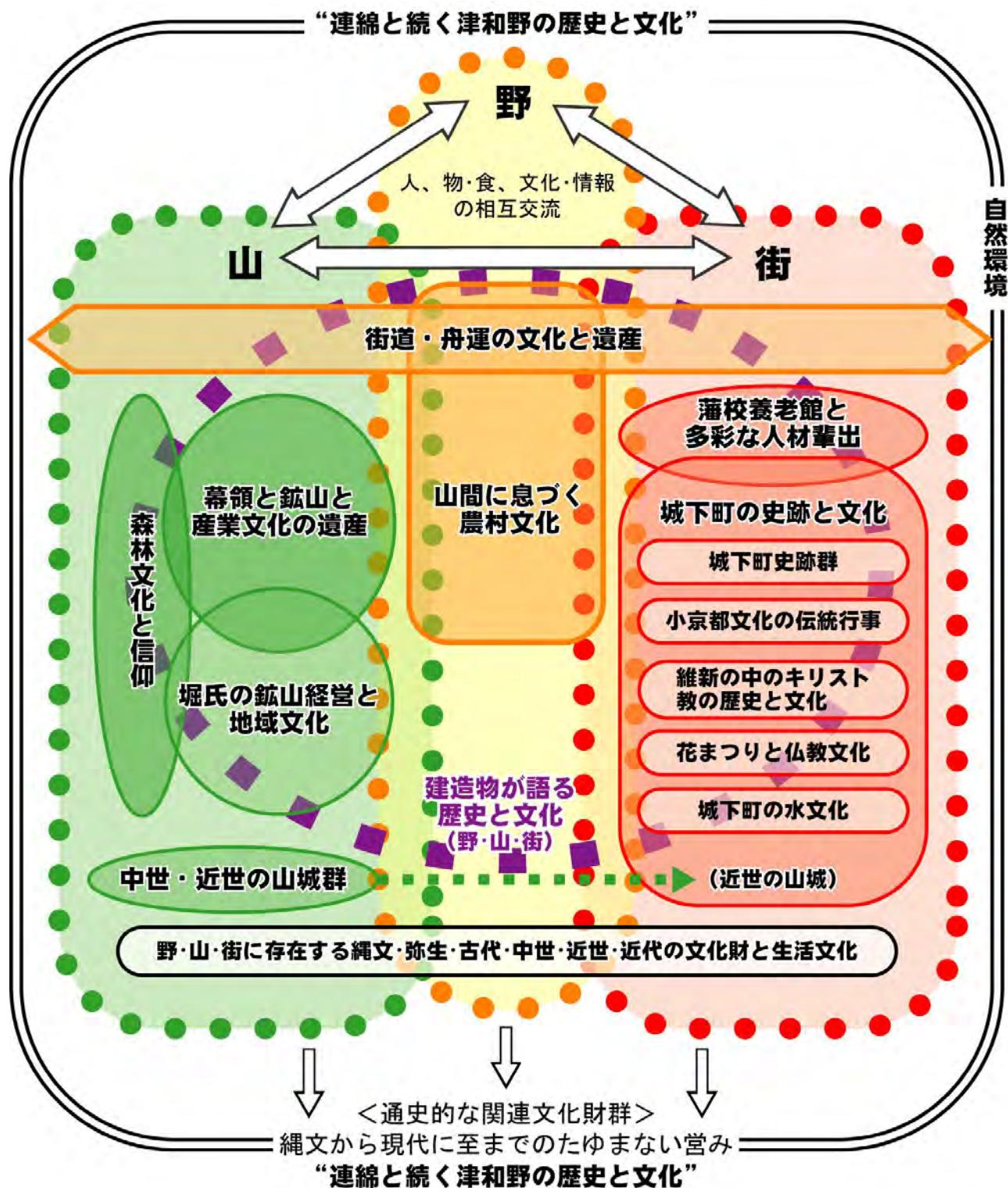
津和野町は、山間に位置し、近世城下町をはじめとし、個々の集落が単独で周辺環境とあいまって特長ある文化的環境を形成している。文化財の特性を見いだす上において考慮すべきは、個々の文化財が集落内において相互に関連し合って地域の特性を示すもの（狭義性）もあれば、個々の文化財が他の集落の文化財と横断的に関連し合ってはじめて価値をなすもの（広義性）も存在するものもある。

また、関連文化財群の設定においては、以下に示す基本的な考え方に基づき、①関連性、②テーマ性③意義・役割、④核となる文化財が明確となる必要となる。

こうしたことを踏まえ、津和野町においては、次のような基本的な考え方のもとに関連文化財群を設定する。

＜関連文化財群の設定の基本的な考え方（基準）＞

- コンセプト（“野・山・街”と共に存する津和野の歴史文化を、地域で引き継ぎ、生かす）とその背景（津和野の歴史文化と“野・山・街”的文化財、その特性）に基づいていること
- 対象となる文化財が相互に歴史的な関連性を有し、その内容及び価値が明らかなものであること。
- 指定（または登録）文化財または今後指定されるべき文化財を含み、かつ、関連する文化財を有すること。
- 共通する保存・活用のテーマ等が見いだせること。



関連文化財群のテーマと構成

関連文化財群の設定（1／4）

関連性の視点（切り口） ～設定の考え方～	関連文化財群の内容（概要）		主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
	関連文化財群 【名称（テーマ）】	意義・役割	
（主として）街	・教育・人材育成、思想の面からのテーマ等の検討 ・人物によるテーマ等の検討	■人材育成に関わる関連文化財群 【藩校養老館と多彩な人材輩出】	現在も残る藩校養老館と、ここで学び近代日本の礎となつた多くの人材やその関連する文化財について再認識し、保存・活用する。
（主として）山	・城跡に関するテーマの検討	■城跡を中心とした関連文化財群 【中世・近世の山城群】	全国的にも数少ない近世山城（津和野城跡）や地域に広がる数多くの中世山城に光を当て、城からみた歴史文化と津和野の特性を見いだし、保存・活用する。

注) ■は広義の関連文化財群、□は狭義の関連文化財群



藩校養老館



西周旧居



森鷗外旧宅



桜陰館（岡熊臣旧宅）



津和野城跡



下瀬山城跡

関連文化財群の設定（2／4）

関連性の視点（切り口） ～設定の考え方～	関連文化財群の内容（概要）		主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
	関連文化財群 【名称（テーマ）】	意義・役割	
（主として）街	・城下町に関するテーマ等の検討 ※歴史文化保存活用区域と連携	■城下町に関わる史跡や建造物、民俗文化を中心とした関連文化財群 【城下町の史跡と文化】	城下町に関わる史跡や建造物、民俗文化などを総体として保存・活用する。
	・近世城下町に関わる建造物や遺跡に関するテーマの検討	□近世城下町の史跡群 【城下町史跡群】	近世城下町遺跡内（全域が周知の遺跡）にあって、現在までその構造等を良好に残すもの（史跡）を関連文化財群として保存・活用する。
	・民俗文化財に関するテーマ	□城下町の民俗芸能に関する関連文化財群 【小京都文化の伝統行事】	小京都文化のひとつである祇園祭は津和野の特長であり、それらを一括して保存・継承する。
	・宗教に関するテーマ	□キリスト教と乙女峠祭に関する関連文化財群 【維新の中のキリスト教の歴史と文化】	宗教の混在する津和野におけるキリスト教の歴史。関連する文化財を一体として保存・継承する。
	・花まつりに関するテーマ	□花まつりに関する関連文化財群 【花まつりと仏教文化】	お釈迦様の誕生日を祝う宗派を超えた仏教文化を保存・継承する。
	・水に関するテーマ	□水に関する関連文化財群 【城下町の水文化】	周囲を山に囲まれた街には水路が張り巡らされ、周囲の農村部とは異なる小京都としての独特的の文化が育まれた。それらを一体として保存・活用する。



鷲原八幡宮流鏑馬馬場



津和野弥栄神社の鶯舞



津和野カトリック教会



永明寺



亀井氏庭園

関連文化財群の設定（3／4）

関連性の視点(切り口) ～設定の考え方～	関連文化財群の内容(概要)		主な文化財 ★：核となるもの(指定・登録) ☆：指定等を目指すもの
	関連文化財群 【名称(テーマ)】	意義・役割	
(主として山)	・幕領と鉱山と産業文化からのテーマ等の検討	■銅山とたたら場跡を中心とした関連文化財群 【幕領と鉱山と産業文化遺産】	津和野の経済的基盤と産業文化を生み出した数多くの鉱山、たたら場を再認識し、守り、生かす。
	・堀氏に関わるテーマ等の検討※歴史文化保存活用区域と連携	■堀氏の鉱山経営と地域の暮らしに関する関連文化財群 【堀氏の鉱山経営と地域文化】	近代まで引き継がれていた鉱山経営と産業文化、そして地域との関わりを再認識し、守り、生かす。
(主として野)	・山陰道をはじめとした街道や舟運を軸としたテーマ等の検討	■街道・舟運の遺産を中心とした関連文化財群 【街道・舟運の文化と遺産】	山陰道をはじめとした街道、高津川の舟運、陸と川の道の結節、及びそれらとつながる産業や暮らしの文化を再認識し、守り、生かす。
野・山・街	・歴史的建造物を中心としたテーマ等の検討	■多彩な歴史的建造物を中心とした関連文化財群 【建造物が語る歴史と文化】	津和野の歴史文化を伝える町家や民家などを再認識し、守り、生かす。



旧堀氏庭園



山陰道（野坂峠越）



馬場先櫓



物見櫓



多胡家表門



津和野町役場（旧鹿足郡役所）

関連文化財群の設定（4／4）

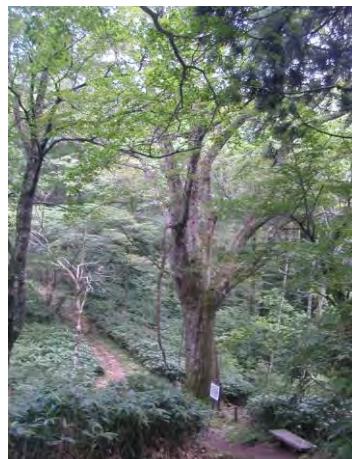
関連性の視点（切り口） ～設定の考え方～	関連文化財群の内容（概要）		主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
	関連文化財群 【名称（テーマ）】	意義・役割	
（主として）野	・農村の伝統文化と信仰に関わるテーマ等の検討	■多彩な農村文化を中心とした関連文化財群 【山間に息づく農村文化】	津和野は城下町、幕領（2箇所）を除くとその多くが農村であり、相互に関連する伝統文化や、信仰の対象となる文化財について一体として保存・活用する。
（主として）山	・森林文化と信仰に関わるテーマ等の検討	■山と森に関する関連文化財群 【森林文化と信仰】	豊かな森や山々の自然環境を次代に引き継ぐとともに、そこでの暮らしの文化（足跡）や信仰を保存・継承する。
野・山・街	・通史的な関連文化財群の検討	■縄文から現代に至るまでのたゆまない営み 【連綿と続く津和野の歴史と文化】	古代（先史）から現代まで、文化財を通じて、時間軸を意識しながら、津和野の歴史文化と歩み、そして、特色・魅力を体験できるようにする。



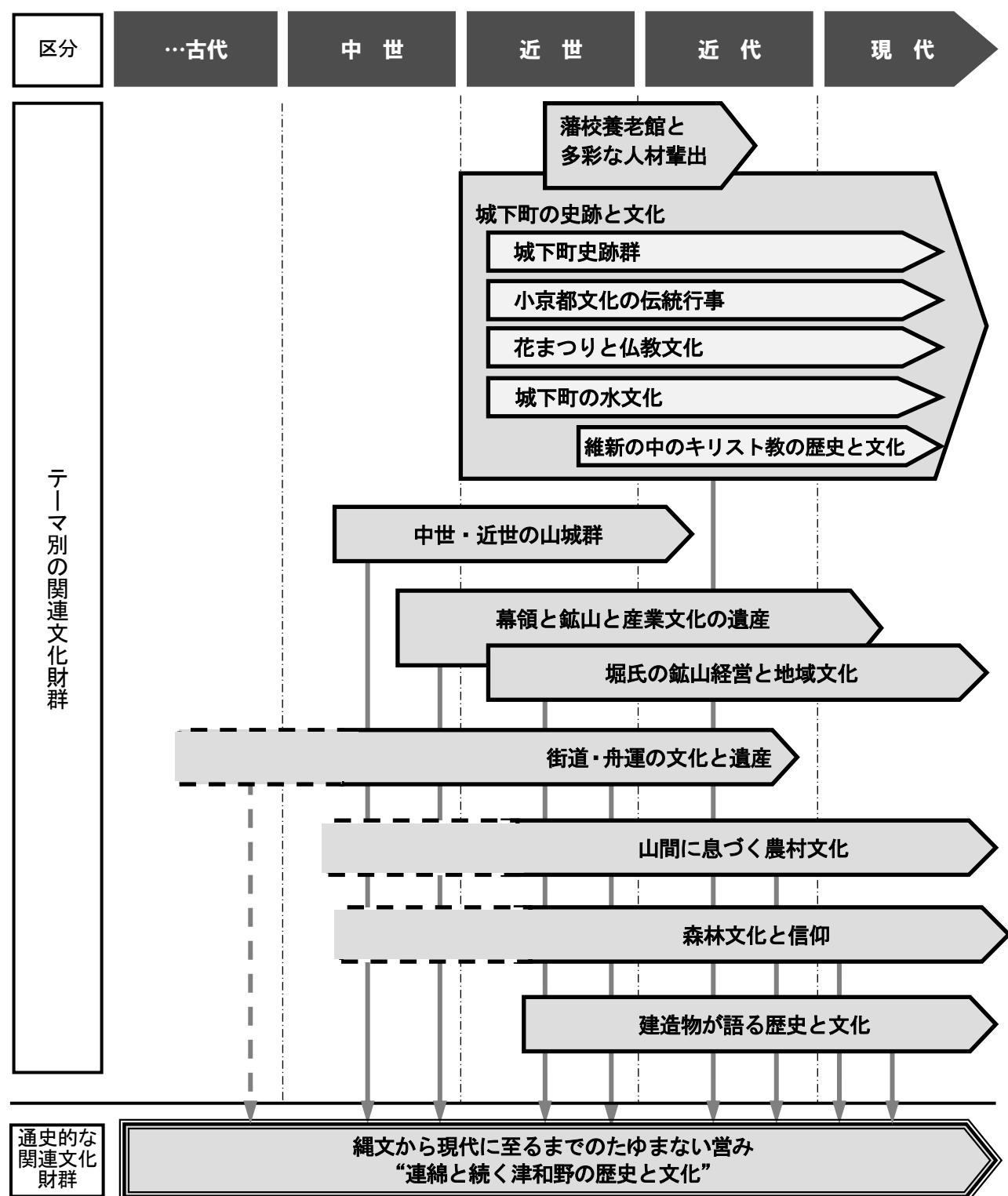
神社の社叢（左鎧八幡宮）



竹原家住宅



安蔵寺山の大ミズナラ
(令和元年9月に暴風により倒木)



関連文化財群の時代と通史的な関連文化財群の設定

2 歴史文化保存活用区域の設定

歴史文化保存活用区域は、関連文化財群や個々の文化財を核とし、それらと一体となって価値をなす周辺の環境を含めて、文化的な空間を創出するための計画区域として設定するものである。

津和野町は山間に位置し、個々の集落が単独で周辺環境とあいまって特徴ある文化的環境を形成しており、それが街道や河川などを通じて相互に密接に関連しあっている。保存活用区域として設定するためには、核となる指定文化財（今後その価値を明らかにし、指定すべきものも含む）や、関連文化財の一部を含み、特長ある歴史文化の継承と文化財の保護・活用が図られることが必要となってくる。

こうしたことを踏まえ、津和野町においては、次のような基本的な考え方のもとに、歴史文化保存活用区域を設定する。

＜歴史文化保存活用区域の設定の基本的な考え方＞

- ①コンセプトに基づいていること（一貫性）
- ②文化財が相対的に集積していること（存在性）⇒指定文化財（国・県・町指定：今後指定を目指すものも含む）または関連文化財群の一部が含まれていること
- ③対象区域が津和野の歴史を語る上で地域特有の歴史文化を有し、指定文化財や関連文化財群と密接に関連して、一体として保護の対象となるべき文化財が多数存在すること（関連性）
- ④周辺環境を含め文化財を核とした文化的な環境づくりが可能であること（発展性）

歴史文化保存活用区域の設定の基本的な考え方の意図すること

基本的な考え方	「基本的な考え方」と「一体となって価値をなす周辺環境」との関係
①コンセプトとその背景に基づいていること（一貫性）	○設定区域はコンセプト（山・野・街）と密接に関わり、歴史的背景を有しているもの。 ○文化財調査及びコンセプト等に基づいて設定した視点を基本とし、区域（広がり・周辺環境）が明確となるもの。
②文化財が相対的に集積していること（存在性）	○指定文化財が存在するか、または関連文化財群の一部を含み、それが地域（歴史文化保存活用区域）の特性を表わすランドマーク（目印、象徴）となっていること。 ○核となる文化財または関連文化財群と近隣接する文化財が多数存在し、文化財の存在（集積、密度）から区域が設定できること。
③地域特有の歴史文化を有し、指定文化財や関連文化財群と密接に関連して、一体として保護の対象となるべき文化財が多数存在すること（関連性）	○核となる指定文化財、または今後指定を目指す文化財と密接に関連し、地域の特性を表す構成要素が多数存在すること。 ○その中には今後調査を進め、文化財指定を目指すべき文化財を有すること。
④周辺環境を含め文化財を核とした文化的な環境づくりが可能と考えられること（発展性）	○設定した区域において、地域の特性を表す個々の指定文化財やその他文化財、関連文化財群が、将来にわたって一体的・持続的に、整備を伴いながら保存・活用していくことができ、文化的な環境づくりにつながるものであること。

歴史文化保存活用区域の設定（1／3）

領域（広がり）の視点（切り口）	区域 【名称】	意義・役割	主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
○津和野城跡と旧城下町及びその周辺の一体的な区域の検討 ○路地や水路など、暮らしの空間文化を通じた区域の検討 ○城下町文化の視点から意義・役割や文化財の検討	●津和野城跡と旧城下町及びその周辺 ●小京都文化を取り上げる区域 【津和野城、城下町遺跡とその街並み】	全国に数例しかない近世山城である津和野城跡、山麓の居館跡や櫓、城下町の面影を伝える街並み、そして関連史跡群を中心に、周辺環境を含めて一体的に保存・活用していく。 また、小京都文化が色濃く残る区域において、その継承と活用を図る。	★津和野城跡 ★藩校養老館 ★多胡家表門 ★鷺原八幡宮 ★永明寺 ★弥栄神社（鷺舞） ★津和野町役場、津和野町郷土館 ★津和野カトリック教会 ★津和野踊り ★流鏑馬神事 ★山陰道（野坂峠越） ★亀井氏庭園 ☆JR山口線（S L運行） ☆高崎亀井家跡 ☆商家 ☆乙女峠と乙女峠まつり ・水路（取り水口）と水文化 ・煎茶文化 ・輪くぐり神事（着物文化） ・庭の文化 ・石州和紙の文化 ・石見瓦と建築様式 ・和菓子文化 ・伝統的食文化 ・大蔭遺跡（縄文） ・高田遺跡（縄文～中世） ・喜時雨遺跡（中世）
○旧堀氏庭園を中心とした区域の検討	●旧堀氏庭園とその周辺 【旧堀氏庭園と関連遺産】	津和野の経済的基盤と産業文化を今に伝える旧堀氏庭園と関連遺産を、周辺環境を含めて一体的に保存・活用していく。	★旧堀氏庭園（主屋、枯山水庭園、楽山荘、和楽園、畠迫病院、畠ヶ迫銀銅山等） ☆墓所 ☆旧川園 ・顕彰碑 ・城ノ腰、外輪、出丸 ・西光寺 ・ホタル など
○笹ヶ谷銅山を中心とした区域の検討	●笹ヶ谷銅山一帯 【幕領の繁栄と歴史を伝える鉱山遺跡】	中世から採掘され、江戸時代には幕領として、地域経済や幕府の財政を支えた鉱山や関連遺構などを、一体的に保存・活用していく。	☆笹ヶ谷銅山跡（坑道、製錬所跡） ☆中木屋城跡 など
○津和野における築城と思想の始まりを知ることのできる区域の検討	●木部の集落を中心とした区域 【吉見氏の入部と津和野の思想の発祥の地】	吉見氏が津和野に入った最初の拠点であり、その関連遺跡群や津和野における神道の発祥の地である地域を、一体的に保存・活用していく。	★岡熊臣旧宅 ★木蘭遺跡（吉見氏居館跡及び関連遺跡群） ☆福羽美静生誕地 ☆御嶽城跡、徳永城跡 ☆富長八幡宮 ・銅山の馬車道 ・塩の道 など

歴史文化保存活用区域の設定（2／3）

領域（広がり）の視点（切り口）	区域【名称】	意義・役割	主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
○青野山と一緒にとなった文化的景観による区域の検討 ○棚田を中心とした文化的景観と暮らしの文化を通じた区域の検討	●麓耕・直地の棚田と集落 【青野山周辺の農村景観】	青野山の溶岩の上に形づくられた棚田や石州瓦の集落、暮らしの文化や自然、そして青野山を借景とする特徴的な景観を、一体的に保存・活用していく。	☆棚田景観と集落（麓耕・直地地区：赤瓦、農村集落） ・津和野川 ・清水（湧水） ・麓耕村五神社 ・地倉沼（モリアオガエル） ・地倉権現祭 ・風穴（養蚕） ・噴火跡（麓耕崩れ）
○青野山と一緒にとなった文化的景観による区域の検討 ○田園と暮らしの文化を通じた区域の検討	●笛山の田園と集落 【青野山周辺の石見瓦の集落景観】	青野山の麓に形成された田園と石州瓦の集落、暮らしの文化や自然、そして青野山と一緒にとなった特徴的な景観を、保存・活用していく。	☆田園景観と集落（笛山地区：赤瓦、農村集落） ・廿日市街道（参勤交代） ・風穴（養蚕） ・日参様 ・笛山水源地（湧水） ・南谷発電所跡など
○青野山を中心に一体の区域として捉えることも検討	【青野山一帯の自然と農と暮らしの文化】	上記の2つの区域と青野山を、一体的に保存・活用していく。	★青野山 ・山王権現 など



青野山と麓耕の集落と津和野川



青野山と笛山の集落

歴史文化保存活用区域の設定（3／3）

領域（広がり）の 視点（切り口）	区 域 【名称】	意義・役割	主な文化財 ★：核となるもの（指定・登録） ☆：指定等を目指すもの
○高津川や源流域（横道川）の自然と暮らしに関わる文化圏の検討	●豊かな森林と清流が息づき、平家伝説の伝わる左鎧の集落やたら場跡を中心とした区域 【森と清流と平家伝説の文化圏】	豊かな自然とともに暮らしてきた人々の足跡と文化を、森や清流や伝説などと一緒にした圏域として保存・活用していく。	★龍谷たらたら跡 ★下森酒造場 ★左鎧八幡宮社叢 ☆たらたら場 ・水力発電所跡 ・茶屋跡 ・神楽 ・ブナの原生林 ・ホタル など
○日原の街並み等の再評価と一体的な区域の検討	●日原及び枕瀬の街並みを中心とした区域 【幕領と川が育んだ街並み景観】	かつて鉱山で賑わい、幕領であった地域の歴史文化、そして高津川と緑に囲む石州瓦の街並みを、周辺環境を含めて一体化して保存・活用していく。	★藤井家住宅 ★枕瀬代官所跡 ☆水津家住宅ほか ☆歴史民俗資料館（資料等） ・赤瓦の街並み（日原天文台からの景観など） ☆高津川と周辺の文化的景観 ☆日原銅山跡 ・奴道中 など
○天然記念物やそれを取り巻く文化的景観による区域の検討	●大元神社跡の樟を中心とした区域 【県下一の大木を中心とした農村景観】	大元神社跡の樟を中心とした農村景観を守るとともに、それと一緒に存在する文化財を保存・活用していく。	★大元神社跡の樟（クスノキ） ★三渡八幡宮（本殿、社叢） ★下瀬山城跡 ★社地脇古墳跡 ・集落（田園） ・歯の地蔵様、耳の地蔵様 ・薬師堂（目の神様） ・カブトエビ など
○街道と舟運の結節点における歴史的な区域の検討	●青原・柳村の集落を中心とした区域 【街道と舟運が交わる交易・交流遺産】	山陰道と高津川の舟運の結節点として、交易・交流で栄えた歴史文化と集落を、周辺環境を含めて一体化して保存・活用していく。	★青原八幡宮（社叢） ★青原代官所跡 ★山陰道（徳城峠越） ・渡し跡 ★柳神楽と神楽面 ☆網代 ☆原田家（たらたら）墓所 ★奴道中 ・尾中山城跡、大嶽城跡 など
○河川（高津川）と景観・生活文化をつなぐ区域の検討	●高津川とその周辺 【高津川の恵みと文化的景観】	日本一の清流である高津川とその恵みである生業や暮らしの文化、そして景観を、川を軸として一体化して保存・活用していく。また、上流の吉賀町、下流の益田市と連携した取組を進める。	☆高津川の文化的景観 (安蔵寺山とミズナラ・ブナ巨木林、雄滝、雌滝、たら跡、棚田、沢ワサビ、漁（アユ、カニ、ウナギ）、渓流魚（ゴギ、ヤマメ）平家伝説、巖島神社、水力発電所跡など)



高津川



横道川

